

42260

教科書文庫

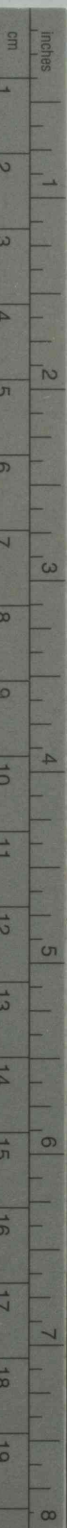
4
815
42-1929
20000
65214

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

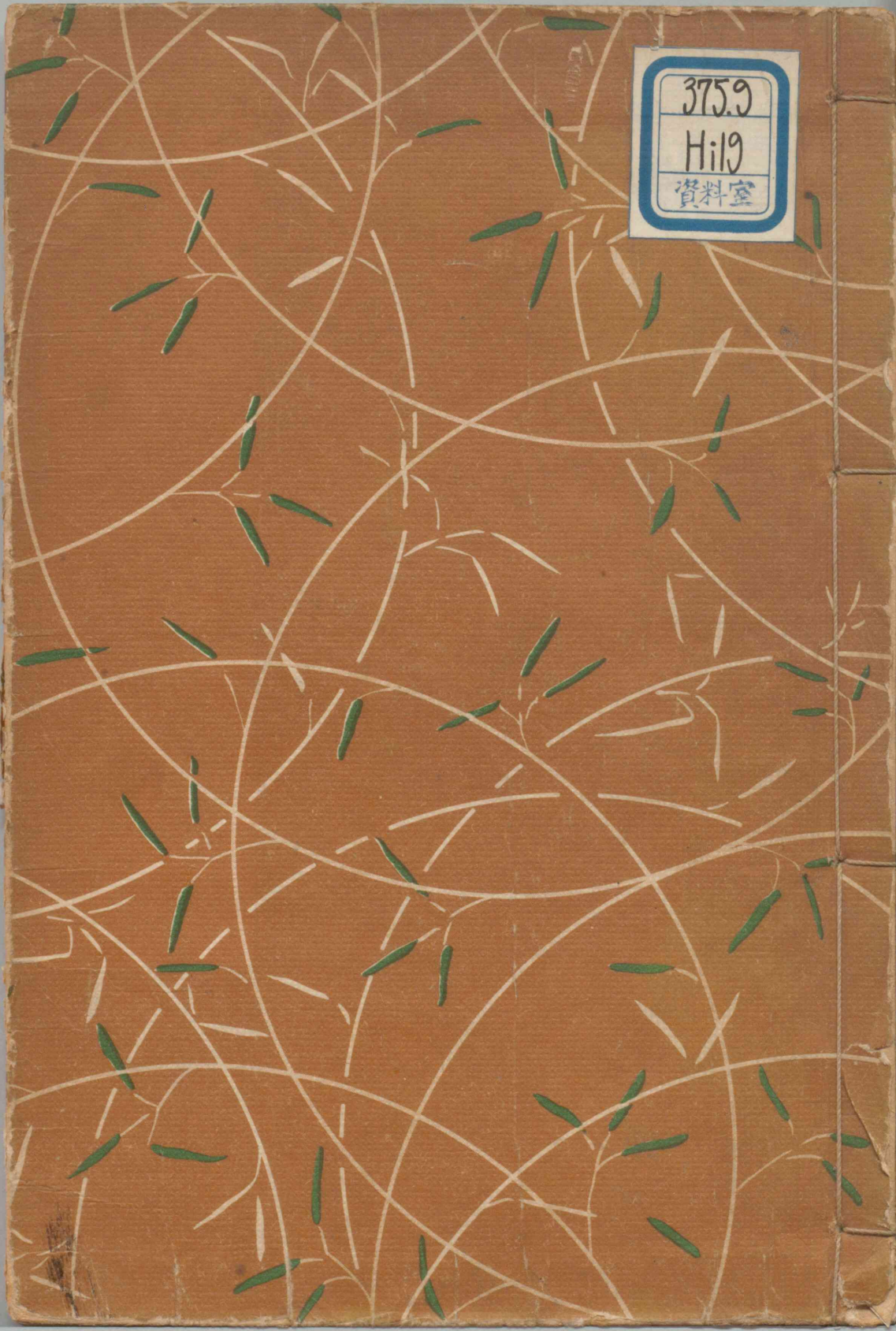


Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

3759
Hil9
資料室



375.9
H119

東京帝國大學
助教授文學士 久松潜一著

女子日本新文法

株式會社
東京開成館藏版

女子日本新文法

— 目次 —

第一章 總說	一
國語 口語 文語 方言 標準語 文法 文 單語 品詞	三
第二章 名詞	三
固有名詞 普通名詞 名詞の複數 數詞	三
第三章 代名詞	五
人代名詞 自稱 對稱 他稱 不定稱 物代名詞 近稱 中稱	五
遠稱 不定稱	五
第四章 動詞	八

目次



第五章 形容詞……………10

體言 用言

第六章 助動詞……………13

第七章 副詞……………14

第八章 接續詞……………17

第九章 感動詞……………19

第十章 助詞……………22

第十一章 動詞の活用形……………23

活用 活用形 語根語幹 語尾 未然形 連用形 終止形 連體形
已然形 命令形

第十二章 動詞の活用の種類その一(文語)……………25

正格活用 變格活用 四段活用 上二段活用 下二段活用 上一段

活用 下一段活用 カ行變格活用 サ行變格活用 ナ行變格活用
ラ行變格活用

第十三章 動詞の活用の種類その二(口語)……………28

四段活用 上一段活用 下一段活用 カ行變格活用 サ行變格活用

第十四章 動詞の活用の見分け方……………37

四段活用の見分け方 上二段活用の見分け方 下二段活用の見分け方

第十五章 動詞の自他……………39

自動詞 他動詞

第十六章 語尾の紛れ易い動詞……………41

ア行に活用する動詞 ャ行に活用する動詞 ヲ行に活用する動詞
ヅ行に活用する動詞 ダ行に活用する動詞

第十七章 形容詞の活用附形容動詞……………45

ク活用 シク活用 口語形容詞の活用 形容動詞

第十八章 用言の音便…………… 四

イ音便 ウ音便 撥音便 促音便

第十九章 助動詞の種類及び活用その一(文語)…………… 五

時の助動詞 打消の助動詞 推量の助動詞 受身の助動詞 可能の

助動詞 使役の助動詞 尊敬の助動詞 指定の助動詞 詠歎の助動

詞 希望の助動詞 比較の助動詞

第二十章 助動詞の種類及び活用その二(口語)…………… 六

時の助動詞 打消の助動詞 推量の助動詞 受身の助動詞 可能の

助動詞 使役の助動詞 尊敬の助動詞 指定の助動詞 希望の助動

詞 比較の助動詞

第二十一章 動詞と助動詞との接続その一(文語)…………… 七

動詞の未然形に続く助動詞 動詞の連用形に続く助動詞 動詞の終

止形に続く助動詞 動詞の連體形に続く助動詞 動詞の已然形に續

く助動詞

第二十二章 動詞と助動詞との接続その二(口語)…………… 八

動詞の未然形に続く助動詞 動詞の連用形に續 助動詞 動詞の終
止形に續く助動詞 動詞の連體形に續 助動詞

第二十三章 助動詞相互の接続…………… 八

第二十四章 助詞の種類及び用法…………… 九

體言に添ふ助詞 種々の語に添ふ助詞 用言に添ふ助詞

第二十五章 誤り易い助詞の用法…………… 九

ばの用法 ともどももの用法 なな…その用法 との用法 やかの
用法 ぞなむこそその用法

第二十六章 誤り易い品詞…………… 一〇

なり たり ぬ な なむ しか

第二十七章 語の構成…………… 一〇

熟語 疊語 接頭語 接尾語

第二十八章 品詞の轉成……………一二

轉成の名詞 轉成の代名詞 轉成の副詞 轉成の接續詞

第二十九章 文の成分……………一三

主語 述語 客語 修飾語 獨立語

第三十章 文の成分の位置及び省略……………一六

普通的位置 成分の倒置 成分の省略

第三十一章 節……………一三

名詞節 形容詞節 副詞節 述語節 小主語 總主語 對立節

第三十二章 文の構造上の種類……………一五

單文 複文 重文

第三十三章 文の性質上の種類……………一六

敘述文 疑問文 命令文 感歎文

附 錄 一

○練習問題……………一三

品詞 動詞助動詞の活用 音便 動詞の用法(正誤) 助動詞の意義

用法 紛れ易い品詞 助動詞の用法(正誤) 助詞の用法 文の成分

文の種類 係結 雜題(正誤)

附 錄 二

○文法上許容スベキ事項……………一四

附 表

- 動詞活用表・形容詞活用表
- 助動詞活用表
- 動詞と助動詞との接續表

總説
 國語
 口語
 文語
 方言
 標準語

女子日本新文法

第一章 總説

我々日本人が話したり書いたりする日本語を、我々は國語といつてゐる。國語には主として日常の對話に用ひられるものと、記録にだけ用ひられるものとの二種がある。前のを口語といひ、後のを文語といふ。

◎口語にはその地方に限つて用ひられる語、即ち方言が少くないが大體關東地方のと關西地方のとの二つに分れる。東京語は關東地方の方言に屬し、その純正なものは標準語となつてゐる。

文法

文語も口語も長い間の變遷發達を経て來たので、色々の法則が生じた。この法則を文法といふ。

我々は色々の語を結び合せて一つの纏まつた思想を表す。

(一) 人¹學²ばざれば³道⁴を知ら⁵ず⁶。

(二) 花¹が美²しく咲³いた⁴。(口語)

右の(一)は八つの語を、(二)は五つの語を結び合せて一つの纏まつた思想を表した例である。かやうに一つの纏まつた思想を表すものを文といひ、個々の語を單語といふ。

單語は、その性質や役目の上から、

- 名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 副詞 接續詞
- 感動詞 助詞

の九つに分れる。この各を品詞といひ、總稱して九品詞といふ。

單文語

品詞

名詞

第二章 名詞

名詞とは事物の名を表す語をいふ。

東京 富士山 楠正成 西郷隆盛 のやうに、一つの物や一人の

人に限つて用ひられる名詞を固有名詞といふ。

花 鳥 忠義 孝行 のやうに、同種類の何れの事物にも用ひら

れる名詞を普通名詞といふ。

名詞を複數にするのに、人人 國國 山山 のやうに、同語を繰

返すものと、我等 私ども 生徒たち のやうに、他の語を添へ

るものがある。

名詞の中で、事物の數量または順序を表すものを數詞といふ。

(一) 數量を表す數詞

固有名詞

普通名詞

名詞の複數

數詞

一 | 二十 | 三百 | 四千 | 五萬 | 六億
 一冊 | 二人 | 三足 | 四升 | 五ダース

(二) 順序を表す數詞

第一 | 二つめ | 三等 | 四番 | 五號 | 第六回

練習

次の文から名詞を擇び出せ。

- (イ) 春は野邊に花咲き、山々霞み渡る。
- (ロ) ふとん着て寝たる姿や東山。
- (ハ) 一富士、二鷹、三茄子。
- (ニ) 心に望起らば、困窮したる時を思ひ出すべし。
- (ホ) 勉強は幸福の母である。(口語)
- (ヘ) 昨日の遠足は愉快であつた。(口語)

代名詞

第三章 代名詞

代名詞とは事物の名の代りに用ひられる語をいふ。

(一) 人代名詞 人の名の代りに用ひられる代名詞をいふ。

- | | | | | | |
|-----|---|----|-----|----|-----|
| (イ) | わ | われ | 余 | 僕 | 私 |
| (ロ) | な | なれ | 汝 | 君 | あなた |
| (ハ) | か | かれ | あれ | 口語 | あの人 |
| (ニ) | た | たれ | どなた | 口語 | |

右の中、(イ)は話す人自身を指す語で、自稱といひ、(ロ)は相手を目指す語で、對稱といひ、(ハ)は第三者を指す語で、他稱といひ、(ニ)はそれと定め

自稱
 他對稱

不定稱
物代名詞

ぬ人を指す語で、不定稱といふ。

(二)物代名詞 事物場所方向の名の代りに用ひられる代名詞をい

ふ。

(イ) こ | これ

事物

こ、

場所

こち | こなた | こちら(口語)

こつち(口語)

方向

(ロ) そ | それ

事物

そこ

場所

そち | そなた | そちら(口語)

そつち(口語)

方向

(ハ) か | かれ | あ | あれ

事物

かしこ | あそこ(口語)

場所

あなた | かなた | あちら(口語)

あつち(口語)

方向

近稱
中稱
遠稱
不定稱

(ニ) いづれ | なに | どれ(口語)

事物

いづこ | いづく | どこ(口語)

場所

いづち | いづかた | どちら(口語) | どつち(口語)

方向

右の中、(イ)は近いのを指す語で、近稱といひ、(ロ)はやゝ離れたのを指す語で、中稱といひ、(ハ)は遠いのを指す語で、遠稱といひ、(ニ)はそれと定めないので指す語で、不定稱といふ。

練習

次の文から代名詞を擇び出せ。

(イ) 艱難汝を玉にす。

(ロ) 彼も人なり、我も人なり。

(ハ) これとそれと何れか優れる。

動詞

第四章 動詞

動詞とは事物の動作・存在を表す語をいふ。

- (一) 花咲く。
- (二) 鳥歌ふ。
- (三) 弟は本を讀む。

- (ニ) この美はかの美と相映じて、自然の彩色をなす。
- (ホ) こゝは南門の跡、そこは金堂の跡、かしこは法華堂の跡、見廻せば、いづこも懐舊の種ならぬはなし。
- (ヘ) あなたはどなたでしたか。(口語)
- (ト) 岸のこちらで眺める人もあれば、またあちらの坂を登つて行く人もある。(口語)

- (四) 彼は運動し、且勉強す。
 - (五) 月落ち、鳥啼きて、霜天に滿つ。
 - (六) 順風に帆をあげる。(口語)
 - (七) 書物が机の上にある。(口語)
- 右の中、(一)から(六)までは動作を表し、(七)は存在を表す。

練習

次の文から動詞を擇び出せ。

- (イ) 笑ふ門には福來る。
- (ロ) 言ふは易く、行ふは難し。
- (ハ) 能く學び、又能く遊ぶべし。
- (ニ) 運は傍觀する人を去りて、奮闘する人に來る。

形容詞

- (ホ) 春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。
- (ヘ) 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。
- (ト) 岩石が面白く並び木立が小暗く繁る。(口語)
- (チ) 窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入りこみ、室の内を蒼白く照らした。(口語)
- (リ) 怨に報いるに徳を以てするといふこともある。(口語)

第五章 形容詞

形容詞とは事物の性質、状態を表す語をいふ。

- (一) 義は重く、死は軽し。
- (二) 山高く、水長し。

體言
用言

- (三) 雪は白く、炭は黒い。(口語)
 - (四) 清い流に沿うて、美しい花が咲いてゐる。(口語)
- 無しは事物の存在しないことを表す語であるが、これも形容詞である。

以上述べた品詞の中で、名詞と代名詞とを體言といひ、動詞と形容詞とを用言といふ。

練習

次の文から形容詞を擇び出せ。

- (イ) 高き山の上に美しき花咲く。
- (ロ) 涼しき濱風、真白き帆影、目に入るもの皆快し。

- (ハ) 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
- (ニ) 三度たく飯さへこはしやはらかし、心のまゝにならぬ世の中。
- (ホ) 弱いものを苦しめるのは悪い。(口語)
- (ヘ) 姉は優しく、弟は勇ましい。(口語)

助動詞

第六章 助動詞

助動詞とは動詞に添うてその意味を助ける語をいふ。

- (一) 學生は勉強を第一とすべし。
- (二) 知らざるを知らずとせよ。これ知るなり。
- (三) つとめて善をなさば、終に善人とならむ。
- (四) 花瓣が風に吹かれて散つた。(口語)
- (五) 行かうか、行くまいか。(口語)

助動詞には、次のやうに名詞・代名詞・形容詞・助動詞などに添ふものもある。

- (一) 東京は日本の首府なり。
- (二) 今日の花役者はあなただ。(口語)
- (三) 傍に人なき如し。
- (四) 彼の喜び、知るべきなり。

練習

次の文から助動詞を擇び出せ。

- (イ) 楠正成は忠臣なり。
- (ロ) 人に知られずとも罪は罪なり。
- (ハ) 手折らるゝ人に薫るや梅の花。

副詞

第七章 副詞

副詞とは動詞・形容詞の意味を限定する語をいふ。

- (一) 日うらかに照る。
- (二) 風ますく烈し。
- (三) 雨はまだ降る。(口語)
- (四) この花は甚だ美しい。(口語)

- (ニ) 屋根も庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなし。
- (ホ) 子らはみな軍のにはに出ではてて、翁やひとり山田もらむ。
- (ハ) 落葉が風に吹かれて舞ひ揚つた。(口語)
- (ト) 己に恥ぢない工夫をなすべきだ。(口語)
- (チ) 父に手紙を書かせられた。(口語)

右の例で、うらかにまだは動詞の照る降るの意味を限定し、ますく美しいの意味を限定してゐる。副詞はまた他の副詞の意味を限定する。

- (一) 飛行機いと速かに飛ぶ。
- (二) 彼は極めて熱心に勉強する。(口語)

右の例で、いと極めては副詞の速かに熱心にの意味を限定してゐる。

◎副詞は他の語を隔てて動詞形容詞などを限定することがある。
頗る山水の景に富む。少しも怒つてゐる様子がない。(口語)

主な副詞

主な副詞

時間に關するもの

昔 既に 嘗て 今 現に 早速 遂に 未だ 將に

暫く 久々 ゆるく ぢきに(口語) すぐに(口語)……
 場所に關するもの
 ここに そこに 遙かに 近く 前に 左に……
 程度に關するもの
 僅かに 殆ど 甚だ 全く 大概 全然 もつと(口語) た
 んと(口語)……
 状態・方法などに關するもの
 明かに 靜かに 巧に 能く 決して 必ず 恐らく……

練習

次の文から副詞を擇び出し、且それに限定された語をいへ。
 (イ) 風徐ろに吹きて、笹の葉かすかに動く。

接續詞

第八章 接續詞

接續詞とは語句を接續する語をいふ。

- (一) 國語及び歴史を豫習す。
- (二) 書を読み且字を習ふ。

- (ロ) 日はやがて暮れむとするも、行く手はいと遙かなり。
- (ハ) 君臣の分極めて明かに、父子の親甚だ厚し。
- (ニ) 雲をりく人をやすむる月見かな。
- (ホ) 今日山がはつきり見える。(口語)
- (ヘ) 朝早く散歩するのはわけて心地がよい。(口語)
- (ト) ちよつとお待ち下さい。決して御迷惑はおかけしませんから。(口語)
- (チ) 私は彼女とやゝ暫く語りあつた。(口語)

主な接續詞

- (三) 夏は来りぬ。されど未だ暑からず。
- (四) 可なり練習した。それだのに負けた。(口語)
- (五) あなたは行きますか。それとも歸りますか。(口語)

主な接續詞

又 且又 はた又 則ち 或は 若しくは 然るに 然しな
 ながら 然らば 故に 況や 随つて 尤も……
 口語では次のやうなものがある。
 けれども それだから さうして さうすると ところが
 それから……

練習

次の文から接續詞を選び出せ。

- (イ) 霞か、雲か、はた雪か。
- (ロ) 求めよ、然らば與へられむ。
- (ハ) 人を尊べ。されど、度を過せば阿諛アウの誹ヒを免れず。
- (ニ) 親族並に知人を招待す。
- (ホ) 不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し。
- (ヘ) 随分勉強した。けれども、思はしい結果を得なかつた。(口語)
- (ト) 口は禍の門だ。それだから、言語は慎まなければならぬ。(口語)

感動詞

第九章 感動詞

感動詞とは事物に感動した時に發する語をいふ。

- (一) あな、嬉し。
- (二) あゝ、悲しいかな。

(三) あはれ、勇ましき人よ！
 (四) まあ、よくおいでなさいました。(口語)
 (五) おやく、それは大變ですな。(口語)
 凡べて、喜んだり、悲しんだり、驚いたり、怖れたりした時に發する音聲は感動詞である。

(一) いざ、行かむ。

(二) やよ、暫く待て。

(三) もしく、一寸お待ち下さい。(口語)

(四) さあ、始めよう。(口語)

右のやうに、呼びかけたり、誘つたりする語も感動詞である。

練習

次の文から感動詞を擇び出せ。

- (イ) あはれ、我が友も亡き人の數に入りぬ。
- (ロ) いでや、目に物見せてくれむ。
- (ハ) あつばれ名馬や、何者の馬ぞ。
- (ニ) いざ、出發せむ。
- (ホ) いやはや、とんだ事になりました。(口語)
- (ヘ) えい、さうですとも。(口語)

助詞

第十章 助詞

助詞とは上下の語句を結びつけて、その關係を表す語をいふ。

- (一) 我が國。
- (二) 櫻の花。
- (三) 本を讀む。
- (四) 東京より大阪まで行く。

てにをは
(てには)

- (五) 雨降らば中止せむ。
 - (六) 差支あれば缺席す。
 - (七) 空晴れたれども浪高し。
 - (八) 飛べば飛ばれる。(口語)
 - (九) 風が強くても行かう。(口語)
 - (一〇) 今日こそしつかりやらう。(口語)
- ◎ 助詞は「てにをは」または略して「てにば」ともいふ。

練習

次の文から助詞を擇び出せ。

- (イ) 樂あれば苦あり。
- (ロ) 視れども見えず。
- (ハ) 來年は來年はとて暮れにけり。
- (ニ) 汝に幸福を與ふる者は唯汝のみ。
- (ホ) 子を見るより親を見よ。
- (ヘ) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

動詞の活用形

第十一章 動詞の活用形

- (ト) 準備は出來たのに、まだ始まらない。(口語)
- (チ) 雨が降つてゐるのに、風までが吹いて來た。(口語)

動詞は用ひ方の異なるにつれて語形が色々に變る。

- (一) 我死なば、世は尊氏の心のまゝならむ。
- (二) 一門盡く王事に死に果てたり。
- (三) 生ある者は遂には死ぬ。
- (四) 死ぬる覺悟を要す。
- (五) 死ぬれども名は朽ちず。
- (六) 花々しく君の馬前に死ぬ。

活用

右のやうに、動詞の語形の變ることを活用といひ、活用のおのゝ

活用形
語根(語幹)
尾

の形を活用形といふ。その活用する一語の中で、變らない部分を語根または語幹といひ、變る部分を語尾といふ。右の例の死は語根で、な に ぬ ぬる ぬれ ね は語尾である。

動詞の活用形は、(一)を未然形、(二)を連用形、(三)を終止形、(四)を連體形、(五)を已然形、(六)を命令形といふ。

未然形

(一) 未然形 死なば。 死なむ。 のやうに、事のまだならぬ場合に用ひられる。

連用形

(二) 連用形 死に果つ。 死に絶ゆ。 のやうに、用言に連ねる場合に用ひられる。

終止形

(三) 終止形 死ぬ。 のやうに、言ひ切る場合に用ひられる。

連體形

(四) 連體形 死ぬる覺悟。 死ぬる身。 のやうに、體言に連ねる場合に用ひられる。

已然形

(五) 已然形 死ぬれども。 死ぬれば。 のやうに、事の已すになつた場合に用ひられる。

命令形

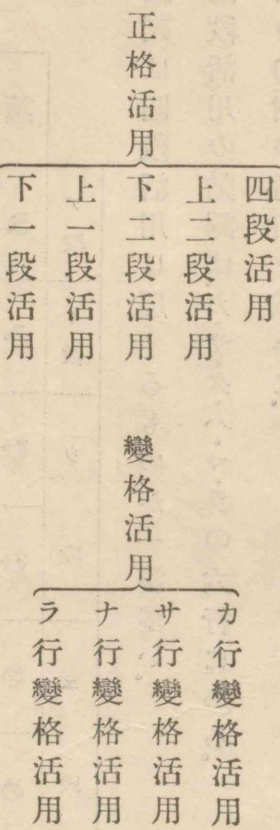
(六) 命令形 死ぬ。 のやうに、命令する場合に用ひられる。

動詞の活用の種類(文語)

第十二章 動詞の活用の種類 その一(文語)

動詞の活用には次の九種類がある。

正格活用
變格活用
四段活用



(一) 四段活用 五十音圖のア段・イ段・ウ段・エ段の四段に活用する。

上二段活用

動詞は四段活用に属するものが一番多い。四段活用の動詞は、カ・サ・タ・ハ・マ・ラの六行にある。次の動詞の活用を試みよ。

勝つ。増す。走る。書く。思ふ。摘む。

(二) 上二段活用 五十音圖のイ段ウ段の二段に活用する。但し、連體形に、已然形に、命令形に、よが添はる。

	語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア段	讀	ま	み	む	む	め	め
イ段							
ウ段							
エ段							
段							

	語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
イ段	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
ウ段							
エ段							
段							

下二段活用

上二段活用の動詞は、カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行にあつて、その数は相當に多い。次の動詞の活用を試みよ。

閉づ。強ふ。恨む。懲る。老ゆ。盡く。

◎恨むは四段に活用させてもよい。(文法許容事項第一参照)

(三) 下二段活用 五十音圖のウ段エ段の二段に活用する。但し、連體形に、已然形に、命令形に、よが添はる。

	語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
エ段	教	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
ウ段							
エ段							
段							

下二段活用の動詞は五十音圖の各行にあつて、四段活用に次いでその数が多い。

上一段活用

次の動詞の活用を試みよ。

堪ふ。受く。流る。尋ぬ。捨つ。絶ゆ。

(四) 上一段活用 五十音圖のイ段の一段だけに活用する。但し、終止形・連體形に、已然形に、命令形によが添はる。

語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	い	い	いる	いる	いれ	いよ
(射)	イ段					

上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの六行にある。次の語がこれに屬し、その數は少い。

着る。似る。煮る。干る。見る。(惟みる) 鑑みる。顧みる。試みる。射る。鑄る。居る。用ゐる。率ゐる。

下一段活用

◎試みるはマ行上二段に用ゐるはハ行上二段にも活用する。

(五) 下一段活用 五十音圖のエ段の二段だけに活用する。但し、終止形・連體形に、已然形に、命令形によが添はる。

語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	け	け	ける	ける	けれ	けよ
(蹴)	エ段					

下一段活用の動詞は、蹴るの一語だけである。

(六) カ行變格活用 五十音圖のイ段・ウ段・オ段の三段に活用する。但し、連體形に、已然形に、命令形によが添はる。

カ行變格活用

語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	こ	き	くる	くる	くれ	こよ
(來)	オ段					

サ行變格活用

カ行變格活用は上二段活用に似てゐるが、オ段にも活用する點が異なる。變格活用といはれるのはこのためである。カ行變格活用の動詞は、來きたの一語だけである。

◎來きたは四段活用である。

(七)サ行變格活用 五十音圖のイ段・ウ段・エ段の三段に活用する。但し、連體形に^レ已然形に^レ命令形によが添はる。

		語根/活用形			
		未然形	連用形	終止形	連體形
エ段	イ段	せ	し	す	する
		ウ	す	すれ	せよ
		エ段	せよ		

サ行變格活用は下二段活用に似てゐるが、イ段にも活用する點が異なる。變格活用といはれるのはこのためである。サ行變格活用の動詞は、爲な、在あの二語だけである。但し、他

ナ行變格活用

の語と熟合してこの活用となることが甚だ多い。

罪つとす。物ものす。心こころす。勉つと強つとす。運うご動ごす。物もの語ごす。信しんず。
潔けつくす。正ただしくす。美うつくしくす。……

(八)ナ行變格活用 五十音圖のア段・イ段・ウ段・エ段の四段に活用する。但し、連體形に^レ已然形に^レが添はる。この點が四段活用と異なる。變格活用といはれるのはこのためである。

		語根/活用形			
		未然形	連用形	終止形	連體形
ア段	イ段	な	に	ぬ	ぬる
		ウ	ぬ	ぬれ	ぬ
		エ段	ぬ		

ナ行變格活用の動詞は、死しぬ。往いぬ。の二語だけである。

◎死しぬは四段に活用させてもよい。(文法許容事項第一參照)

◎死しすはサ行變格活用である。

ラ行變格活用

(九)ラ行變格活用 五十音圖のア段・イ段・ウ段・エ段の四段に活用する。この點はラ行四段活用と同じであるが、終止形がラ行四段活用ではあるが、ラ行變格活用ではりである。變格活用といはれるのはこのためである。

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	有	ら	り	り	る	れ	れ
ア段			イ段		ウ段	エ段	段

ラ行變格活用の動詞は、有り、居り、侍り、の三語だけである。

◎居りは四段に活用させてもよい。(文法許容事項第一參照)

練習

次の文から動詞を擇び出して、その活用を示せ。

動詞の活用の種類(口語)

四段活用

- (イ) 年若くして學ばずば、老いて悔ゆることあらむ。
- (ロ) 精神一たび到らば何事か成らざらむ。
- (ハ) 事の成るは必ず由つて起る所あり。
- (ニ) 花笑ひ、鳥歌ひ、空長閑かに霞み、水暖かに流れて、陽氣天地に満つ。

第十三章 動詞の活用の種類 その二 (口語)

口語の動詞の活用には次の五種類がある。

(一)四段活用

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
讀	ま	み	む	む	め	め	
死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね	
有	ら	り	る	る	れ	れ	

文語では、死ぬはナ行變格活用であり、有りはラ行變格活用であり、そして、讀むはやはり四段活用である。それゆゑ、文語の四段活用及びナ行變格活用、ラ行變格活用は、口語ではともに四段活用となる。

上一段活用

(二) 上一段活用

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起		き	き	きる	きる	きれ	きまよ
(射)		い	い	いる	いる	いれ	いまよ

文語では、起くは上二段活用であり、射るはやはり上一段活用である。それゆゑ、文語の上二段活用、上一段活用は、口語ではともに上一段活用となる。

下一段活用

(三) 下一段活用

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
教		へ	へ	へる	へる	へれ	へまよ
(蹴)		け	け	ける	ける	けれ	けまよ

文語では、教ふは下二段活用であり、蹴るはやはり下一段活用である。それゆゑ、文語の下二段活用、下一段活用は、口語ではともに下一段活用となる。

カ行變格活用

(四) カ行變格活用

語根	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來)		こ	き	くる	くる	くれ	こまよ

來は口語でもカ行變格活用であるが、終止形と命令形とが文語の活用と異なる。

サ行變格活用

(五) サ行變格活用

語根	活用形
(爲)	未然形
し	連用形
し	終止形
する	連體形
する	已然形
すれ	命令形
し	せよ
せ	

爲は口語でもサ行變格活用であるが、未然形と終止形と命令形とが文語の活用と異なる。

次に文語の動詞の活用と口語の動詞の活用とを比較しよう。

文語 (九種)	口語 (五種)
四段活用	口語 (五種)
ナ行變格活用	四段活用
ラ行變格活用	
上二段活用	
上一段活用	上一段活用

動詞の活用の見分け方

下二段活用	下一段活用
下一段活用	下一段活用
カ行變格活用	カ行變格活用
サ行變格活用	サ行變格活用

練習

次の語の活用を試みよ。

増す。勝つ。着る。落ちる。恨みる。恐れる。眺める。載せる。

第十四章 動詞の活用の見分け方

上一段活用・下一段活用・變格活用に屬する語は、前に述べたやうに數が少いので覚え易いから、四段活用・上二段活用・下一段活用に屬

四段活用の見分け方

する語を見分けることが出来れば、動詞の活用を誤ることはない。
(一) 四段活用の見分け方 動詞の未然形に、文語ならば「ず」、口語ならば「ない」を續けて、語尾が「ア段」であれば四段活用である。

ア段
讀ま
ず
ない

上二段活用の見分け方

(二) 上二段活用の見分け方 前と同様に試みて、語尾が「イ段」であれば上二段活用である。

イ段
起き
ず
ない

下二段活用の見分け方

(三) 下二段活用の見分け方 前と同様に試みて、語尾が「エ段」であれば下二段活用である。

エ段
勤め
ず
ない

練習

次の語の活用の種類を問ふ。

- 立つ。
- 釣る。
- 往ぬ。
- 似る。
- 生く。
- 報ゆ。
- 寄す。
- 兼ね。
- 譽む。
- おはす。
- 植う。

第十五章 動詞の自他

動詞の自他
自動詞

(一) 自動詞 動作がそれを起す主だけに止まつて、他に及ばない動詞をいふ。

主
鳥
自動詞
飛ぶ。

他動詞

花^主 開く^{自動詞}

(二) 他動詞

動作がそれを起す主だけに止まらないで、他にまで及ぶ動詞即ち動作を受ける目的のある動詞をいふ。

犬^主 門^{目的}を^{目的} 守る^{他動詞}

猫^主 鼠^{目的}を^{目的} 捕ふ^{他動詞}

◎自動詞と他動詞とは、形の同じいもの、また、よく似たものがある。

形の同じいもの

花 開く^(自動詞)

風 吹く^(自動詞)

門を開く^(他動詞)

笛を吹く^(他動詞)

形の似たもの

月 見ゆ^(自動詞)

葉 落つ^(自動詞)

月を見る^(他動詞)

葉を落す^(他動詞)

練習

次の文の動詞の自他を區別せよ。

(イ) 己を責めて、人を責むるな。

(ロ) 水涸れ、石出づ。

(ハ) 小人閑居して不善をなす。

(ニ) 飢に臨んで苗を植う。

語尾の紛れ易い動詞

第十六章 語尾の紛れ易い動詞

(一) ア行・ハ行・ヤ行・ウ行に活用する動詞の語尾は、いひ^ル・あ^ル・と^ウ・ふ^ユと^ズ・へ^スとがそれ^ク紛れ易い。しかし、ア行・ヤ行・ウ行のそれ^クに活用する動詞は、凡そ次に挙げるものであるから、その外は大抵ハ行に活用すると心得ればよい。

ア行に活用する動詞

得^え

ヤ行に活用する動詞

老^ら 悔^{くわい} 報^{ほう}

絶^{ぜつ} 癒^{いゆ} 覺^{かく}

肥^ひ 凍^こ 榮^{えい}

煮^{しゆ} 映^{えい} 生^{せい}

燃^{ねん} 萌^も 悶^{もん}

射^{しゃ} 鑄^{ちゆう}

(上二段)

(下二段)

(上一段)

ワ行に活用する動詞

植^ち 飢^う 据^こ

居^ゐ 率^{りつ} 有^あ

(下二段)

(上一段)

(二) ザ行、ダ行に活用する動詞の語尾も、^ぢぢと^ずずとがそれ／＼紛れ易い。しかし、ザ行に活用する動詞は次に挙げるものだけであるから、その外はダ行に活用すると心得ればよい。

(下二段)

論^{ろん}ず 重^{おも}んず 變^かず…… (ザ行變格)

練習

(一) 次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

(イ) 問えども答えず。

(ロ) 仰いて天に恥じず。

(ハ) 老ひては子に従へ。

(ニ) 足の疲るゝも厭わず。

(ホ) 治にいて亂を忘れず。

- (ヘ) 夜更け、月牙へ、犬の聲遠く聞えたり。
- (ト) 十年の計は木を植ふるにあり。百年の計は人を教うるにあり。
- (チ) 悔ひ改めよ。過を改めるに恥ずることなかれ。
- (リ) 言うは易く、行うは難し。
- (ヌ) 自ら爲し得ざることを人に強ゆべからず。
- (ル) 佐渡の島山は霞に消えて、見れども見へず。
- (ニ) 次の文の傍線を施してある所を口語に直せ。
 - (イ) 英名朽つることなし。
 - (ロ) 人を侮らば、やがて悔ゆることあるべし。
 - (ハ) 義のために死ぬるは武士の本分なり。
 - (ニ) 本日出發す。
- (三) 次の文の傍線を施してある所を文語に直せ。
 - (イ) さう澤山載せると落ちる。
 - (ロ) 生きることばかり企てるのが良いとは限らない。

形容詞の活用
附 形容動詞
形容詞の活用

形容詞も活用する。

第十七章 形容詞の活用 附 形容動詞

- (ハ) 興へるのは受けるのにまさる。
- (ニ) 生活の道を得るために日々勤める。

品 善し。

善くば買はむ。
 善くあり。
 善きものあり。
 善けれども買はず。

花 美し。

美しくば求めむ。
 美しく咲く。
 美しき木あり。
 美しけれども小なり。(已然形)

(未然形) 美しくば求めむ。
 (連用形) 美しく咲く。
 (終止形) 美し。
 (連體形) 美しき木あり。

◎形容詞の活用を動詞の活用に比較して見ると、次のことが分る。
 (イ) 命令形がない。

ク活用
シク活用

形容詞の活用
でも動詞の活
用と同じく變
らない部分を
語根(語幹)と
いひ變る部分
を語尾といふ

(ロ)カ行とサ行との二行に活用する。
(ハ)未然形には助動詞が續かぬ。
(ニ)連用形は多くは副詞の役目をする。
形容詞の活用には二種ある。前の例の善しのやうに變化するのをク活用といひ、美しのやうに變化するのをシク活用といふ。次に表で示さう。

活	用	語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ク活用	善		く	く	し	き	けれ	○
シク活用	美		しく	しく	し	しき	しけれ	○

○シク活用の終止形を惡しし勇まししなどのやうに用ひる習慣のあるものはしを重ねて使用してもよい。(文法許容事項第二参照)
○無しは動詞有りに對する語であるが、事物の存在を否定する形容詞で

口語形容詞の
活用

形容動詞

ある。

次の形容詞の活用を試みよ。

嬉し。面白し。無し。長し。賢し。麗し。

口語ではク活用とシク活用との區別がない。また未然形がなくなり、已然形が假定の意味を表す。次に表で示さう。

語根/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
善	○	く	い	い	けれ	○
美し						

形容詞の連用形及びに^てで終る副詞は、動詞ありと熟合して、次のやうな形となり、ラ行變格活用の動詞のやうに活用することがある。

善くあり——善かり。
 正しくあり——正しかり。
 静かにあり——静かなり。
 燦然とあり——燦然たり。

右の語は、意味は形容詞的で、活用は動詞的であるから、形容動詞といはれる。

練習

次の文から形容詞・形容動詞を擇び出して、その活用を示せ。

- (イ) 古きを温ねて、新しきを知る。
- (ロ) 遠き慮なければ、必ず近き憂あり。
- (ハ) 松青く、樓門赤く、花極めて白し。
- (ニ) 樂しかりし往時を追懷す。

用言の音便

音便の四種類

イ音便

- (ホ) 我が國民は、熱し易く、冷め易し。
- (ヘ) 雨もよし、露もよし、霰も霰も、空より降るものの面白からぬはなきが中に、雪は特にめでたし。
- (ト) 若々しい青葉に月が宿つて美しい。(口語)
- (チ) 樂しい時に苦しい時のことを忘れるな。(口語)
- (リ) 涼しい風に送られて、琴の音がゆかしく聞える。(口語)

第十八章 用言の音便

音便とは、發音の便宜上、音が他の音に變ることをいふ。

音便には、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。動詞にはこの四種の音便があり、形容詞にはイ音便・ウ音便の二種がある。

(一) イ音便 きぎがいに轉ずるもの。

ウ音便

驚おどきて。 驚おどいて。
 仰うやぎて。 仰うやいで。
 善よきかな。 善よいかな。
 悲かなしきかな。 悲かなしいかな。

形容詞

◎右の外御座りますを御座いますといひ、況ししてを況しいてといふやうな例もある。

◎イ音便のいをひと書いてはならぬ。

(二)ウ音便 ひくがうに轉ずるもの。

笑わらひて。 笑わらうて。
 問とひて。 問とうて。
 高たかく聳こゆ。 高たかう聳こゆ。
 美うしく咲さく。 美うしう咲さく。

動詞

形容詞

撥音便

(三)撥音便 にびみがんに轉ずるもの。

死しにて。 死しんで。
 飛とびて。 飛とんで。
 讀よみて。 讀よんで。

動詞

◎撥音便のんをむと書いてはならぬ。

促音便

(四)促音便 ちりひがつに轉ずるもの。

勝かちちて。 勝かちつて。
 歸かへりて。 歸かへつて。
 誓ちかひて。 誓ちかつて。

動詞

練習

(一) 次の文にある音便の原音をいへ。

(イ) 負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。

(ロ) 仰いで天の廣さを見る。

(ハ) 飛んで火に入る夏の蟲。

(ニ) 勇氣を奮つて出場した。(口語)

(ホ) お便りを戴き嬉しう存じます。(口語)

(二) 次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

(イ) 笑ふて答へず。

(ロ) 旅に病むで夢は枯野をかけめぐる。

(ハ) 淵に臨むで魚を羨むは、退ひて網を結ぶに如かず。

(ニ) 朝に星を戴ひて出て、夕に月を踏むで歸る。

(ホ) 秋も深ふなりまさりて、蟲の音もいと悲しふ身にしみぬ。

(ヘ) お早う御座ゐます。(口語)

(ト) 御機嫌よふいらつしやいまして、おめでたふ存じます。(口語)

助動詞の種類及び活用文語

時の助動詞

過去の助動詞

未來の助動詞

第十九章 助動詞の種類及び活用 その一 (文語)

助動詞はその意味によつて次の十一種に分れる。

時 打消 推量 受身 可能 使役 尊敬 指定

詠歎 希望 比較

(一) 時の助動詞 時を表す助動詞で、過去・未來・完了の三種に分れる。

(イ) 過去の助動詞 動作が今より以前に起つた意を表すもので、

き けり の二語がある。

昨日雨降り
き けり。

(ロ) 未來の助動詞 動作が今から後に起る意を表すもので、む の一語がある。

完了の助動詞

明日雨降らむ。

(一) 完了の助動詞 動作が完全に成立した意を表すもので、つぬたりりの四語がある。

雨降りいで
つぬたり。

雨降りり。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	けり	○	○	き	し	しか	○
き	(けり)	○	○	き	し	しか	○
む	けり	○	○	き	し	しか	○
む	ける			し			
め	けれ			しか			
○	○			○			

打消の助動詞

(二) 打消の助動詞 打消の意を表す助動詞で、すざりじまの四語がある。

勉強を怠ら
すざりじま。

◎括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

◎むは普通にんと發音し、文字もんと書く。

◎つぬたりは過去の意にも用ひられる。

◎りは過去の意にも動作の繼續進行の意にも用ひられる。

り	たり	ぬ	つ
(ら)	たら	な	て
(り)	たり	に	て
り	たり	ぬ	つ
る	たる	ぬる	つる
(れ)	たれ	ぬれ	つれ
(れ)	(たれ)	ぬ	てよ

勉強を怠るまじ。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
じ	○	○	じ	じ	じ	○
ざり	ざら	ざり	ざり(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
ず	ず	ず	ず	ぬ	ぬ	○

◎ざりはず^レにラ行變格活用の動詞ありが結びついてつとまつたものである。

◎じとまじとは推量して打消す意を表す。

推量の助動詞

(三) 推量の助動詞 推量の意を表す助動詞で、らむ らし べし べかり めり む まし けむ の八語がある。

花散るべし。

らし。らむ。
べかりき。
めり。

花散ら
まし。む。

花散りけむ。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	らし	らし	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○

べし
めり
む
まし
けむ

べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べかり	○	(べかる)	(べかれ)	○
めり	○	めり	めり	める	めれ	○
む	○	○	む	む	め	○
まし	○	○	まし	まし	ましか	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○

◎べかりはべしの連用形にラ行變格活用の動詞ありが結びついてつゞまつたもので、べしと同じ意に用ひられる。

◎けむは過去の動作を推量するのに用ひられる。

べしの用法 べしは、推量の外に、次の例のやうに色々の意に用ひ

られる。
推量
可能

當然 人生の長短は事業の大小を以て量るべし。
三尺の秋水鐵をも斷つべし。

受身の助動詞

命令 學生は校則を守るべし。
決意 余は自ら處決すべし。
(四) 受身の助動詞 動作を他から受ける意を表す助動詞で、
らる の二語がある。

鼠猫に喰はる。

生徒、先生に國語を教へらる。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	る	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らるれ	られよ

可能の助動詞

(五) 可能の助動詞 自らその動作を爲し得られる意を表す助動詞で、
で、らる の二語がある。

少しは英語も話さる。

弟には英語を教へらる。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	ら	る	る	る	る	○
らる	られ	られ	らる	らる	らる	らる	○

るらるは動作が自然に起つて止めることが出来ぬ意を表すことがある。この場合には自發の助動詞といふ。

自發の助動詞

子の行末 思はる。

案ぜらる。

練習

次の文から既習の助動詞を選び出して、その種類と活用とをいへ。

- (イ) 風吹かば波立たむ。
- (ロ) 山の紅葉も今は散るらし。
- (ハ) 今日も空しく暮しつ。
- (ニ) あなたこなたをさ迷ふめり。
- (ホ) 古寺の庭に紅つややかなるは若楓なるべし。
- (ヘ) 急がずば濡れざらましを、旅人のあとより晴る、野路の村雨。
- (ト) 荒磯の浪風に吹きすさまれて終夜夢も結ばず。
- (チ) 若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。
- (リ) 日暮れむとする時、西向なる竹縁の上に机を持ち出でて書き終へぬることありき。
- (ヌ) 世に天稟の才といふことなきにあらねど、琢かずば玉も瓦礫に等しかるべし。
- (ル) 英文は相應に讀まるゝも、書くことは未だ自由ならず。

使役の助動詞

(六) 使役の助動詞 動作を他にさせる意を表す助動詞で、す、さ、しむの三語がある。

弟に本を讀ます。
しむ。

庭に木を植ゑす。
しむ。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	

尊敬の助動詞

(七) 尊敬の助動詞 他を敬ふ意を表す助動詞で、る、らる、す、さす、しむの五語がある。

父は書を讀まる。

先生は生徒に國語を教へらる。

殿下は知事を召さす。

皇后陛下には葉山に行啓せさせ給ふ。

天皇陛下には觀兵式に臨ましめ給ふ。

る、らるの活用は受身の助動詞のる、らるの活用と同じく、す、さす、しむの活用は使役の助動詞のす、さす、しむの活用と同じい。

◎可能の助動詞のる、らるは受身の助動詞から轉じたものであり、尊敬の助動詞のる、らる、す、さす、しむは可能及び使役の助動詞から轉じたものである。

指定の助動詞

◎尊敬の助動詞のすさすしむは單獨に用ひることが少く、多くは尊敬の助動詞のらる、または動詞から轉じた尊敬の助動詞の給ふを下につけて用ひる。
よ名詞代名詞につて

(八) 指定の助動詞 事物を指し定める意を表す助動詞で、なりたり の二語がある。

艱難は汝の師なり。

我は源氏の嫡男たり。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

◎指定の助動詞は多くは名詞代名詞につく。

詠歎の助動詞

◎指定のたりは形は完了のたりと同じいけれども、意味は全く違ふ。
(九) 詠歎の助動詞 詠歎の意を表す助動詞で、なり けり の二語がある。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。 D

子を思ふ道に二つはなかりけり。 Δ

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

◎指定のなりは用言の連體形または名詞代名詞に續き、詠歎のなりは用言の終止形に續く。

◎過去のけりと詠歎のけりとは、用法に區別はないから、文全體の意味の

希望の助動詞

上から區別すべきである。

- (一) 希望の助動詞 希望の意を表す助動詞で、たし まほし の二語がある。

花見に
 行きたし。
 行かまほし。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし	たろ	たろ	たし	たき	たけれ	○	○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○	○

比較の助動詞

- (二) 比較の助動詞 事物を比較する意を表す助動詞で、ごとしの一語がある。

光陰は矢のごとし。

ごとしの活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとも	ごとも	ごとし	ごとき	○	○	

練習

次の文から助動詞を擇び出して、その種類と活用とをいへ。

- (イ) 春は島山霞に包まれて眠るが如し。
- (ロ) 榮枯盛衰定めなきはこの世の姿なりけり。
- (ハ) 主上ひそかに笠置山に行幸せしめ給ふ。
- (ニ) 殿下には學習院に御通學あらせらる。
- (ホ) かいあるよき季節に旅行したきは山々なれども、父君の許させ給はねば
- (ヘ) 父父たらずとも子子たらざるべからず。

助動詞の種類
及び活用(口語)

(ト) 人の子たらむものは皆かくあらまほしきものなり。

第二十章 助動詞の種類及び活用 その二 (口語)

口語の助動詞は次の十種に分れる。

- 時 打消 推量 受身 可能 使役 尊敬 指定
- 希望 比較

(一) 時の助動詞 た う よう

過去 た 昨日雨が降つた。

完了 た 今學校から歸つた。

未來

う	これから机に向はう。
よう	文法の勉強をしよう。

う・ようは活用しない。た(過去完了とも)の活用は次のやうである。

時の助動詞

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
た	たら	たり	た	た	たれ	○	

(二) 打消の助動詞 ぬ ない まい

風は吹かぬ。

風は吹くまい。

まいは活用しない。ぬ・ないの活用は次のやうである。

助動詞	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	○	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	○
ない	○	なく	ない	ない	ない	なければ	○

- ぬは普通にんと發音し、文字もんと書く。
- まいは推量して打消す意を表す。

打消の助動詞

推量の助動詞

(三) 推量の助動詞 う よう らしい

皆集つたであらう。
彼は多分賞を受けよう。

今日は名士の演説が澤山あるらしい。

う・ようは活用しない。らしいの活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らしい	らしく	らしく	らしい	らしい	らしけれ	○

◎推量を表すのに やうだ やうです さうだ さうです の語をも用ひる。

受身の助動詞

(四) 受身の助動詞 れる られる

猫が犬に追はれる。

人が馬に蹴られる。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れ、	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られ、	られよ

可能の助動詞

(五) 可能の助動詞 れる られる

漢文も少しは讀まれる。

六時には大概起きられる。

◎可能の助動詞の活用は受身の助動詞の活用と同じで、たゞ命令形のみだけが違う。

◎可能の助動詞は四段活用の動詞と結合して次のやうにつゞまることがある。

行かれる || 行ける。 讀まれる || 讀める。

使役の助動詞

(六) 使役の助動詞 せる させる

騎兵が馬を走らせる。
工兵に橋を架けさせる。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

◎させるがサ行變格のせに續く時には、次のやうにつゞまることがある。

弟に勉強せ。させる 弟に勉強させる。

尊敬の助動詞

(七) 尊敬の助動詞 れる られる ます

父は今朝九時に歸られる。
先生は十時に出發せられる。 出發される。

私はこれから迎へに行きます。

右の中、ますは、動作の主に対する尊敬の意を表すのではなくて、相手に對する尊敬の意を表す。 れる られるの活用は受身のれる られるの活用と同じく、ますの活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます (まする)	ますれ	ませ

◎口語では、右のれる られるの外に、なさる 下さい になる 遊ばすなどの語を助動詞のやうに用ひる。

お読みなさる。
お上り下さい。
お歸りになる。
あいで遊ばす。

指定の助動詞

(八) 指定の助動詞 だ です

彼の前途は有望 だ です。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
だ	だら	だつ	だ	○	○	○
です	でせ	でし	です	○	○	○

◎ですはだの意を鄭重に言ひ表すものである。

◎だの代りにであるをも用ひる。

希望の助動詞

(九) 希望の助動詞 たい

水泳に行きたい。

たいの活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たい	たく	たく	たい	たい	たけれ	○

比較の助動詞

(三) 比較の助動詞 やうだ やうです

色はちやうど雪のやうだ。

歲月は流れるやうです。

右の助動詞の活用は次のやうである。

助動詞/活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなれ	○
やうです	やうでせ	やうでし	やうです	やうな	やうなれ	○

◎やうだやうですは推量比較の二様に用ひられるが、それは文の意味によつて區別すべきである。

練習

次の文から助動詞を擇び出して、その種類と活用とをいへ。

- (イ) 殿下には明治神宮に御参拜あらせられた。
- (ロ) 知らない方から道を尋ねられたが、丁寧^{ていねい}に教へてあげた。
- (ハ) 文法を調べようとか、つたが、なか／＼^{なか／＼} 捗らない。
- (ニ) 明日は、雨は降るらしいが、風は吹くまい。
- (ホ) 長男は農學校を卒業させて、實業に就かせました。
- (ヘ) 誠忠天地を動かし、貞烈鬼神を哭^{なげ}かせた乃木大將夫妻の殉死は、やゝもすれば優柔情弱に流れようとする國民の心を緊張させた。
- (ト) 歩^あがら^らと思へば歩かれたのだが、勧め^{勧め}られたので自動車に乗った。

*三
三
三
三
三
三*

指定

動詞と助動詞との接続文語動詞の未然形に續く助動詞

(一) 動詞の未然形に續く助動詞

第二十一章 動詞と助動詞との接続 その一 (文語)

る

(四段ナ變ラに續く)

散歩に誘はる。

(四段)

らす

(四段ナ變ラに續く)

潔く死なす。

(ナ變)

るる

(四段ナ變ラに續く)

懇に教へらる。

(下二)

さす

(四段ナ變ラに續く)

叔父を來さす。

(カ變)

む

(四段ナ變ラに續く)

花見に行かむ。

(四段)

す

(四段ナ變ラに續く)

未だ吉野を見ず。

(上二)

ざり

(凡べての動詞に續く)

よき折を得ざりき。

(下二)

じ

(凡べての動詞に續く)

卑怯の振舞はせじ。

(サ變)

まし

(凡べての動詞に續く)

鳥の如く飛ばまし。

(上二)

しま

(凡べての動詞に續く)

弟にボールを蹴しまし。

(下二)

しむ

(凡べての動詞に續く)

楽しくあらまほし。

(ラ變)

まほし

(凡べての動詞に續く)

愉快に運動せり。

(ラ變)

り

(凡べての動詞に續く)

愉快に運動せり。

動詞の連用形に続く助動詞

(二) 動詞の連用形に続く助動詞

◎ 下二段活用の動詞の得の未然形得にしむを續けて得しむとすべきを、現代文では得せしむとしてもよい。(文法許容事項第七参照)

◎ サ行變格活用の動詞の未然形せにさすらるを續けてせさすせらるとすべきを、現代文では略して勉強さす勉強さるとしてもよい。(文法許容事項第五第六参照)

◎ 上一段活用の動詞の未然形見着などにしむを續ける時には見しむ着しむとすべきで、見せしむ着せしむとするのは誤である。

けり
つ
たり
けむ
たし

(凡べての動詞に續く)

花咲きけり。(四段)
友人遊びに來つ。(カ變)
郊外を散歩したり。(サ變)
いづこに捨てけむ。(下二)
競技會を見たし。(上一)

きの特例

きはサ行變格活用カ行變格活用の動詞には次のやうに續く。

◎ 時の助動詞きの連體形で文を結んで、鎮火せざりし、面白かりしなどと用ひてもよ。(文法許容事項第三参照)

き

(カ變・サ變には特別の續き方をする)

奮戦して死にき。

(ナ變)

ぬ

(ナ變以外の動詞に續く)

花咲きぬ。

(四段)

カ變 (來)

未然形

し
こ
し
か
こ
し
か
ど
逢
は
ざ
り
き
こ
し
方
行
末
き
し
方
行
末
き
し
か
ど
逢
は
ざ
り
き
上
京
せ
し
こ
と
あ
り
上
京
せ
し
か
ど
逢
は
ざ
り
き
我
も
上
京
し
き

サ變 (爲)

未然形

し
せ
し
か
し
か
上
京
せ
し
こ
と
あ
り
上
京
せ
し
か
ど
逢
は
ざ
り
き
我
も
上
京
し
き

動詞の終止形に続く助動詞

◎ナ行四段活用の動詞の連用形にししかを續けて、押しし押ししかばとすべきを現代文では押しし押ししかばとしてもよい。(文法許容事項第八参照)

(三) 動詞の終止形に続く助動詞

- | | | |
|-----|---------------|------|
| まじ | 今日は來まじ。 | (カ變) |
| らむ | 花や咲くらむ。 | (四段) |
| らし | 人や見るらし。 | (上一) |
| べし | 朝は早く起くべし。 | (上二) |
| べかり | 死ぬべかりし命をながらふ。 | (ナ變) |
| めり | 龍田川紅葉亂れて流るめり。 | (下二) |
| なり | 山寺の鐘の音すなり。 | (サ變) |

動詞の連體形に続く助動詞

(四) 動詞の連體形に続く助動詞

動詞の已然形に続く助動詞

(五) 動詞の已然形に続く助動詞

- | | | |
|-----|----------------|------|
| なり | 花も咲くなり。 | (四段) |
| ごとし | 魚の水あるごとし。 | (ラ變) |
| まじ | さることはあるまじ。 | |
| らむ | かゝることもあるらむ。 | |
| らし | 歸る人もあるらし。 | |
| べし | 深き理由あるべし。 | |
| べかり | 到底あるべからざることなり。 | |
| めり | 花散る木もあるめり。 | |

◎ごとしが連體形に續く時には、その辯舌流るゝがごとしのやうに、その間に助詞のがを入れることもある。

◎りをナ行變格活用の動詞の命令形死ねに續けて死ねりとする事、及びラ行變格活用の動詞の居り異なりの已然形に續けて居れり異なりとする事は、中古文の法則にはあはないが、現代文では許容されてゐる。(文法許容事項第一第四参照)

練習

(一) 次の文から助動詞を擇び出して、動詞との接続を説明せよ。

- (イ) 老いず死なずの薬もがな。
- (ロ) 問ひたりとて彼は答へじ。
- (ハ) 彼は終に訪ひ來ざりき。
- (ニ) 健康にてあらまほし。
- (ホ) 見ゆる限りは櫻なりけり。
- (ヘ) 君が歌こそ聞かまほしけれ。

正語

(二) 次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

- (ト) 先生大いに喜ばる。
- (チ) 遠足せしかど疲勞せざりき。
- (リ) 生くべかりし命を失ひぬ。
- (ヌ) その美しき様目に見るごとし。
- (ル) 弟は入學試験に及第せり。
- (イ) 誓うて君に報ひるべし。
- (ロ) 汝が考ふごとくたやすくは破られまじ。
- (ハ) 年老いて氣力大いに衰へり。
- (ニ) 無用の事には關係せまじきものなり。
- (ホ) 弓を射らむとせば先づ姿勢を正すべし。
- (ヘ) 陳列品に手を觸るべからず。
- (ト) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- (チ) 一時家産を傾けれど、その後隆昌を來せり。

動詞と助動詞との接続(口語)
動詞の未然形に続く助動詞

- (リ) 祖父の友は大方死にぬ。
- (ヌ) 彼は常に深更にいたるまで讀書するらし。

第二十二章 動詞と助動詞との接続 その二 (口語)

(一) 動詞の未然形に続く助動詞

- | | | |
|-----|--------------|--------------|
| う | 花見に誘はう。 | (四段に限って) |
| れる | 花見に誘はれる。 | 續く |
| せる | 潔く死なせる。 | |
| よう | 五時には起きよう。 | |
| られる | 運動を始められる。 | (四段以外の動詞に續く) |
| させる | 明日はきつと來させる。 | |
| まい | まさかそんな事はしまい。 | |

動詞の連用形に続く助動詞

(二) 動詞の連用形に続く助動詞

- | | | |
|----|---------|----------|
| ぬ | まだ集らぬ。 | (四段) 未然形 |
| ない | まだ集らない。 | |
- ◎ぬはサ行變格活用の動詞の未然形に續き、ないは同じくその未然形に續く。
- ◎よう、まいは、サ行變格活用の動詞では未然形のしに續き、せには續かぬ。
- ◎られる、させるは、サ行變格活用の動詞の未然形しに續く時には、つとまつて次のやうになる。
- し。られる。|| される。 し。させる。|| させる。

- | | | |
|----|---------|------|
| た | 春が來た。 | (カ變) |
| ます | 花が咲きます。 | (四段) |
| たい | 花見をしたい。 | (サ變) |
- (凡べての動詞に續く)

動詞の終止形に續く助動詞

動詞の連體形に續く助動詞

(三) 動詞の終止形に續く助動詞

らしい (凡べての動詞に續く) 明日は來るらしい。

(カ變)

まい (四段に限つて續く) 花はまだ咲くまい。

(四段)

(四) 動詞の連體形に續く助動詞

だ (助詞のを隔て凡べての動詞に續く) 朝は早く起きるのだ。

の。だ。 (上一)

です (助詞のを隔て凡べての動詞に續く) 朝は早く起きるのです。

の。です。 (上一)

やうだ (凡べての動詞に續く) まるで花が散るやうだ。

やうだ。 (四段)

やうです (凡べての動詞に續く) まるで花が散るやうです。

やうです。 (四段)

練習

次の文から助動詞を擇び出して、動詞との接續を説明せよ。

(イ) 思ふまいとすればするほど思ひ出されて眠らうとしても眠られない。

助動詞相互の接續

第二十三章 助動詞相互の接續

助動詞相互の接續の法則も、動詞と助動詞との接續の法則と變りがない。

(一) 時に及びて努力せざるべからず。

- (ロ) 船でも行かれるが、汽車の方がよからう。
- (ハ) 堪へられぬこともあるまいから、一つやつて見よう。
- (ニ) もう紅葉も色づいたら、次の日曜に出かけよう。
- (ホ) 明日はお歸りださうですから、お迎へに参りたいと思ひます。
- (ヘ) 迷つたところで今の武藏野に過ぎない。まさか行き暮れて困ることはあるまい。
- (ト) 行きたいのだが、父母が行かせてくれない。
- (チ) 彼は大抵のことは辛抱しよう。

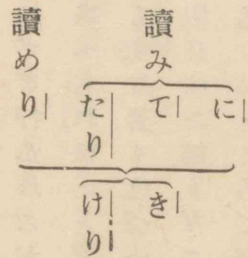
(二) あの方は随分勉強せられたらしい。
 右の(一)の例では、ざるは未然形に續き、べからは連體形に續き、ずは未然形に續いてゐる。 (二)の例では、られは未然形に續き、たは連用形に續き、らしいは終止形に續いてゐて、何れも動詞の場合と變りがない。

時の助動詞の接續

時の助動詞の接續

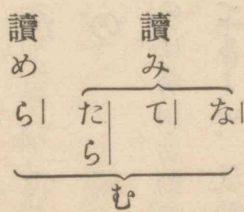
過去の完了

(イ) 過去の完了 完了の助動詞ぬつたりりの連用形と過去の助動詞と接續したもの。



未來の完了

(ロ) 未來の完了 完了の助動詞ぬつたりりの未然形と未來の助動詞と接續したもの。



完了の推量

(ハ) 完了の推量 完了の助動詞と推量の助動詞と接續したもの。

つらむ	ぬらむ	たらむ	るらむ
つらむ	ぬらむ	たらむ	るらむ
つべし	ぬべし	たらむ	るらむ
つべし	ぬべし	たらむ	るらむ
つらし	ぬらし	たらむ	るらむ
つらし	ぬらし	たらむ	るらむ
てまし	なまし	たらむ	るらむ
てまし	なまし	たらむ	るらむ

助詞の種類及び用法

つめりぬめりためりたるめりの約

第二十四章 助詞の種類及び用法

助詞は、(一)體言に添ふもの、(二)種々の語に添ふもの、(三)用言に添ふもの、の三種に分れる。

體言に添ふ助詞

(一)體言に添ふ助詞

我が國の親の恩

◎のは動詞・助動詞の連體形を受けて、花を見るの記のやうに、名詞に續けてもよい。(文法許容事項第九參照)

本を讀む。

北へ行く。(方向)

種々の語に添ふ助詞

(二)種々の語に添ふ助詞

東京から歸る。

徒歩で行く。

口語では、起點を表すよりはからとなり、にてはでとなる。

大阪まで行く。

徒歩にて行く。

故郷に歸る。(場所)

友と遊ぶ。(指定) 君と我と。(並列)

東京より歸る。(起點) 花より團子。(比較)

天は高し。
行をば慎む。
山も川も見える。(並列)

花よりも紅なり。(意味を強める)
 月をぞ愛づる。
 雪をなむ愛づる。
 花をこそ愛づれ。
 花をし見れば物思もなし。
 ありやなしや。
 あるかなきか。(疑問)
 風邪だにひかず。
 禽獸すら恩を知る。
 風さへ吹く。(添加)
 我のみ行かむ。
 色の赤きばかりを擇ぶ。(限定)

(強い指示)
 強 例 助詞 による
 (返語)
 命令 詠 歌
 類推させる
 感 歎

な 笑ふな。
 な…そ 笑ひそ。(禁止)
 口語では、やはかとなり、だにはでもとなり、すらはさへとなり、さへはまでとなり、のみはだけ、またはばかりとなり、な…そはなとなる。
 か あるかないか。
 でも 子供にでもできる。
 さへ 禽獸さへ恩を知つてゐる。
 まで 風まで吹いた。
 ばかり 雨ばかり降つてゐる。
 な 笑ふな。

◎はばもかななどは文語と口語と同じい。
 ◎ぞなむしに當る口語はない。

用言に添ふ助詞

(三) 用言に添ふ助詞

◎こそは「それでこそ男といへる」のやうに、稀に用ひられる。

ば 雨止まば行かむ。(假定)

雨降れば行かず。(確定)

ど 雨止めど行かず。(確定で不順當)

雨止めども行かず。

とも 雨止むとも行かず。(假定で不順當)

夜は未だ明けぬに急ぎ出で立つ。

に 日の輝けるを雨降る。(反對)

を 訪ねしが不在なりき。

が 歩みつゝ語る。

つゝ ながら茶を飲みながら話す。

で 何事をもなさで日を暮す。
口語では、確定のばはのでまたはからとなり、假定のともはでもとなり、をはにとなり、つゝはながらとなり、ではないでまたはずにとなる。

ので 雨が降る 行かない。

から 雨が止んでも行かない。

でも 勉強したのに合格しなかつた。

に 歩みながら話した。

ながら 何事も しないで 日を暮した。

しないで 何事も せずに

誤り易い助詞
の用法
ばの用法

第二十五章 誤り易い助詞の用法

(一)ばの用法 ばは用言の未然形に續いて假定を表し、已然形に續いて確定を表す。

風吹かば波立たむ。(假定)

風吹けば波立つ。(確定)

口語では、假定にはばを已然形に續けて用ひ、確定にはのでまたはからを終止形に續けて用ひる。

風が吹けば波が立たう。

風が吹くので波が立つ。
から

(二)ともどどもの用法 ともは動詞の終止形、形容詞の連用形に續いて假定を表し、どどもは用言の已然形に續いて確定を表す。

ともどどもの
の用法

繪に書くとも 筆も及ばじ。(假定)

堅くとも 破れむ。(假定)

繪に書けど 筆も及ばず。(確定)

堅けれども 破れたり。(確定)

◎ともを動詞・助動詞の連體形に續けて「悔ゆるとも及ばざらむ」問はるゝとも答ふまじのやうにするのは、中古文の法則ではないが、現代文では許容されてゐる。(文法許容事項第一一参照)

◎ともを形容詞の終止形に續けて「悲しとも亂るゝな」と用ひるのは誤である。

◎ともどもの代りにも用ひることがある。誤解を生じない限りは許容されてゐる。(文法許容事項第一五参照)

口語では、ともは連用形に續いてもとなる。どどもはけれどけ

れどもとなつて終止形に續く。

笑はれても忍ぼう。

見^る。けれど見えない。
けれど

なな……その
用法

(三)なな……その用法 なは動詞及び受身使役の助動詞の終止形に
續く。たゞし、ラ行變格活用の動詞には連體形に續く。

危き場所に近寄るな。

人に疎んぜらるな。

ゆめく、他人に知らすな。

長く權勢の地にあるな。

◎猥りに塵埃を捨つるなとするのは誤である。

な……そは、中間に、カ行變格活用サ行變格活用の動詞の未然形、その

他の動詞の連用形を挿む。

春な忘れそ。

な
爲^る來^るそ。

な……その間に助動詞の添はつた動詞を挿むこともある。

近寄りてな怪我させられそ。

口語では、なは文語と同じく終止形に續く。

勉強を怠るな。

との用法

(四)との用法 とには指定のと並列のとがある。共に本來は體言
に續く語であるが、用言助動詞に續くこともある。この場合には、
指定のとは、終止形でも、連體形でも、已然形でも、命令形でも、凡べて
文の切れるところに續き、並列のとは連體形に續く。

指定のと

指定のと

積善の家には餘慶ありと古人もいへり。(終止形)
人やあると問ふ。(連體形)

祝ふ今日こそ樂しけれと唱ふ。(已然形)

汝自身を知れと哲人は戒めたり。(命令形)

◎指定のとは、文法許容事項第一二及び第一六を参照せよ。

並列のと

並列のと

彼は學の博きと徳の高きを以て知らる。

◎並列のとは、誤解を生じない時に限り、最終の語の下のを省くことがある。(文法許容事項第一三参照)

やかの用法

(五)やかの用法 やは用言助動詞の終止形に續き、かはその連體形

に續いて、疑問の意を表す。

有りや、無しや。

有りきや、無かりきや。

有るか、無きか。

有りしか、無かりしか。

◎右は中古文の法則であるが現代文ではやを連體形に續けて、有りやのやうに用ひてもよい。(文法許容事項第一〇参照)

やかは用言助動詞の前に置かれることもある。この場合には下を連體形で結ぶ。

人や來る。

や花や咲きつる。

心や正しき。

誰かある。

か何を見つる。

何れか善き。

◎やとかとは共に疑問の助詞であるが、何誰幾何いづれなどの疑問を表

やかの係

す語が上にある時はかを用ひる。

汝は何歳なるか。

汝は誰なるか。

二の三倍は幾何なるか。

春と秋といづれかよき。

◎現代文では、上に疑問の語のある時、下にやを用ひてもよい。(文法許容事

項第一四参照)

五と八との和は幾何なりや。

やかは疑問の意から轉じて反語となる。

思ひきや、君に別れむとは。

いかでか不義の名を取らむ。

やかに感動詞のはを加へたやはかはもまた反語となる。

君にやは劣るべき。

反語

ぞなむこそ
の用法

招くとも行くべしやは。

誰かはこれを疑ふべき。

いかで悲しみ歎くべきかは。

(六)ぞなむこその用法 この三語は何れも上の語を指示する助詞で、こそは多くの中から特に一つを抜き出して強くいふのに用ひられる。

昔の人の袖の香ぞする。

富士の山なむ古より名を得たる。

花の中にも櫻こそめでたけれ。

ぞなむが文の上にある時は、前に説いたやかと同じく、下を動詞・形容詞助動詞の連體形で結び、こそが文の上にある時は、下を動詞・形容詞助動詞の已然形で結ぶ。

係結

右の場合に於て、やかぞなむこそを係といひ、これに應ずる動詞・形容詞助動詞の活用語尾を結といひ、兩者の關係を係結といふ。

夜	花	月を
<u>なむ</u> <u>ぞ</u>	<u>なむ</u> <u>ぞ</u>	<u>なむ</u> <u>ぞ</u>
明けぬる。	美しき。	愛づる。
夜こそ明けぬれ。	花こそ美しけれ。	月をこそ愛づれ。
(助動詞)	(形容詞)	(動詞)

練習

(一) 次の文から助詞を擇び出して、その用法を説明せよ。

(イ) 天氣よければ舉行す。

(ロ) 水清くば泳がむ。

(ハ) いかにも高くとも登らむ。

(ニ) 月と花とを愛す。

(ホ) 禽獸すら恩を知る。

(ヘ) 夕方まで待ちしに、友は來らざりき。

(ト) すべて月花をばさのみ目にて見るものは、

(チ) よからぬ會合には、な加はり給ひそ。

(リ) 花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、いにしへのことも立返り戀し

う思ひ出でらるゝ。

(ヌ) 柿本人麿なむ歌の聖なりける。

(ル) 霞立つ春の山邊は遠けれど、吹きくる風は花の香ぞする。

(二) 次の口語文を文語文に改めよ。

(イ) 勉強さへすれば、どんなことでも出来る。

(ロ) 雨が降ればやめよう。

- (ハ) どんなに嬉しくても、有頂天になるな。
- (ニ) 天氣がよいから出かけよう。
- (ホ) 秋になつたので、木の葉が色づいた。
- (ヘ) 親に叱られるやうなことをするな。
- (ト) 私には行かないで待ちませう。
- (三) 次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。
- (イ) 初志を貫かむと欲すれば、須らく奮勵努力すべし。
- (ロ) たとひ攻め殺されるとも、いかでか逃るべき。
- (ハ) 貧しきものこそ幸なりと、聖者も教へたれ。
- (ニ) これさへ成せば、他は憂ふるに足らず。
- (ホ) 世の非難を恐れて、卑怯なる振舞するな。
- (ヘ) 板垣死するとも自由は死せず。
- (ト) 當日雨天なれば、順延と心得るべし。
- (チ) 音樂會に出演したることありや。

第二十六章 誤り易い品詞

なり	たり	ぬ	な
<p>讀書の好時節となりぬ。</p> <p>運動も勉強もするなり。</p> <p>彼も人たり、我も人たり。</p> <p>公園を散歩したり。</p> <p>櫻花爛漫たり。</p> <p>花開きぬ。</p> <p>夜の明けぬ前に出發せむ。</p> <p>雨霽れなば散歩せむ。</p> <p>恩を忘るな。</p> <p>花の色はうつりにけりな。</p>	<p>(動詞)</p> <p>(指定の助動詞)</p> <p>(指定の助動詞)</p> <p>(時の助動詞)</p> <p>(形容動詞の語尾)</p>	<p>(時の助動詞)</p> <p>(打消の助動詞ずの連體形)</p> <p>(禁止の助詞)</p>	<p>(感動詞)</p>

なむ

なむ

やがて花も散りなむ。
疾く花も咲かなむ。
花の散るなむ惜しき。

(時の助動詞ぬの未然形に時)
の助動詞むの續いたもの
(希望の助詞)

しか

しか

かくこそありしか。
いつ頃歸りしか。

(時の助動詞さの已然形)
(時の助動詞さの連體形に)
疑問の助動詞の續いたもの

語の構成

第二十七章

語の構成

カウ

熟語

單語が二個以上結びついて一語となることがある。これを語の構成といふ。これに次の四種がある。

- (一) 熟語 二つ以上の單語が合して一語となつたものをいふ。
朝日 山櫻 大和心
- (イ) 物語る 遠ざかる
- (ロ) 物語る 遠ざかる

(名詞)

(動詞)

疊語

(二) 疊語

同じ語が重なつて一語となつたものをいふ。

- (ハ) 名高し 見にくい (形容詞)
- (ニ) 恐らくは ほしいまゝに (副詞)
- (ホ) 随つて 就中 (接續詞)
- (イ) 人々 國々 (名詞)
- (ロ) われ だれ (代名詞)
- (ハ) 神々し 馴れ (形容詞)
- (ニ) 月々 追ひ (副詞)
- (ホ) あはれ おや (感動詞)

接頭語

(三) 接頭語

語の上に添ふ獨立しない語をいふ。

- (イ) うひ陣 を川 み雪 まこも (名詞)
- (ロ) さ迷ふ たなびく いやます ほの見ゆ (動詞)

接尾語

- (四) 接尾語 語の下に添ふ獨立しない語をいふ。
- (ハ) けうとし を暗し か弱し いち早し (形容詞)
 - (イ) 男たち 殿ばら 悲しげ 神さま (名詞)
 - 寂しさ 深み (名詞)
 - (ロ) 私ども 我ら あなたがた (代名詞)
 - (ハ) 時めく 氣色ばむ 大人ぶる 上品ぶる (動詞)
 - 嬉しがる 高まる 神さぶ (動詞)
 - (ニ) 學者らし 露けし 勝手がまし (形容詞)
 - (ホ) 道すがら 花見がてら 少しづつ 思ふまに〜(まゝに) (副詞)

練習

次の文から熟語・疊語・接頭語・接尾語を擇び出せ。

- (イ) 朝日夕日を負ひて鳥がくれ行く白帆の影のどかなり。
- (ロ) 古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな。
- (ハ) 去るものは日々に遠ざかり来るものは刻々に近づく。
- (ニ) 笈かたの音ならでは、つゆ音なふものなし。
- (ホ) さ夜ふけてほの暗さ御あかしの影ものさびし。
- (ヘ) 秋草のとり〜美しい中でも、桔梗は鄙びの少女の色を浮べて、飾らぬ所に風情がある。(口語)
- (ト) 木々の梢が漸く黄ばんで、うら淋しい時となつた。(口語)

品詞の轉成

第三十章 第二十八章 品詞の轉成

或品詞はその形のまゝで他の品詞に轉ずることがある。これを品詞の轉成といふ。

轉成の名詞

(一) 轉成の名詞

月の光 氷の刃 謠の本

(動詞から)

白のたび からしの粉 すしの辨當

(形容詞から)

轉成の代名詞

(二) 轉成の代名詞

君 僕 小生 足下 御前

(名詞から)

轉成の副詞

(三) 轉成の副詞

今日雨降る。朝出で晩歸る。

(名詞から)

あまりひどい。つまり失敗だ。

(動詞から)

早く起き、遅く寝ぬ。風烈しく吹く。

(形容詞から)

轉成の接續詞

(四) 轉成の接續詞

祭日及び日曜は休む。

(動詞から)

練習

次の文から轉成の品詞を選び出し、且その由来を説明せよ。

(イ) 終日食はず終夜寝ねず。

(ロ) 風また吹き來れり。

(ハ) 神前のみあかし淋しう見ゆ。

(ニ) 黒の足袋に白の脚絆をつく。

(ホ) 始あらざるはなく、よく終あるは少し。

(ヘ) この雨に今日出かけるとは、あまりにひどい。(口證)

(ト) 遠くの親類より近くの他人が力になる。(口證)

文の成分

第二十九章 文の成分

文を組立てるものは、いづれも語であるけれども、その職分の上から見ると、おのづから數種に分れる。これを文の成分といふ。文

主語述語

の成分には主語述語客語修飾語獨立語がある。
(一)主語述語 主語とは文の主題となる語をいひ、述語とは主語について述べる語をいふ。主語はおもに名詞・代名詞であり、述語はおもに動詞・形容詞である。但し、そのいづれにも種々の語を添へることがある。

鳥^主啼^述く。

山^主高^述し。

汝^主は 勇^述ましい。(口語)

風^主ばかり 吹^述いてゐる。(口語)

一つの文に主語も述語も重なることがある。

太郎^主も、次郎^主も、運動^述し、勉強^述す。

客語

(二)客語 客語とは述語の目的または標準を表す語をいふ。

(イ) 犬門^客を守る。

(イ) 猫^客が鼠^客を追^述ふ。(口語)

病^客は口^客より入^述る。

(ロ) 風俗^客が野鄙^客になる。(口語)

(イ)は他動詞であるから、門^客を鼠^客をなどの目的を表す語を要し、(ロ)は自動詞であるが、口^客より野鄙^客になどの標準を表す語を要する。右のやうに、客語は主に體言に助詞のをによりなどの結びついたものである。

客語は二つ以上あることもある。

兄^客 弟^客に 英^客語を 教^述ふ。

頼朝^客 義經^客に 平^客氏を 討^述たしむ。

修飾語
形容詞的修飾語

(三) 修飾語 修飾語とは主語述語客語を修飾する語をいふ。

(イ) 形容詞的修飾語 文の成分として用ひられた體言を修飾するものをいふ。

圓き月^主出づ。

彼は初對面の挨拶^客を述べたり。

巍峨^客たる山嶽^客を望む。

雲霞の如き大軍^主笠置の城^客を取圍みぬ。

雄辯な彼は、多くの聽衆^客に深い感動^客を與へた。(口語)

(ロ) 副詞的修飾語 文の成分として用ひられた用言を修飾するものをいふ。

月東山に出づ^述。

獨立語

(四) 獨立語 文の主要部から獨立するもので、接續詞・感動詞・呼掛^{よびかけ}・提示^{しめしめ}などから成る。

彼は勉強せり。然れども遂に落第せり。(接續詞)

あはれ、今年も暮れぬ。(感動詞)

ねえ、兄さん、散歩に出かけませう。(呼掛)

人は眞面目なのがよい。(口語) (提示)

練習

次の文を文の成分に分けよ。

- (イ) 活潑なる精神は健康なる身體に宿る。
- (ロ) 鷗の群れ飛ぶ光景一幅の畫に似たり。
- (ハ) 校長は勤勉なる生徒に賞を與へたり。
- (ニ) 勉めて已まざれば遅くとも目的は成就すべし。
- (ホ) 不忍池詩人これを小西湖といふ。
- (ヘ) いかに母御前父はいづこにましますぞや。
- (ト) 私は國語及び歴史を好みます。(口語)
- (チ) あんなに恐ろしい震災は今後決してありません。(口語)
- (リ) 東京は人口が多い。(口語)

文の成分の位置及び省略

第三十章 文の成分の位置及び省略

文の成分は、これを排列するのには、一定の位置が定まつてゐる。

普通の位置

(一) 普通の位置

- (イ) 主語は上。
- (ロ) 述語は下。
- (ハ) 客語は主語と述語との間。
- (ニ) 修飾語は修飾される語の上。但し、述語の修飾語は主語のすぐ下。
- (ホ) 獨立語は、普通は文の上、接續の語は語句の間。

主 客 述
頼朝義経をして平氏を討たしむ。

主の修 主 述の修 客 述
我が軍大いに敵兵を破る。

主 述
あれ、飛行機が飛んでゐる。(口語)

主 獨 主 述
飛行機及び飛行船が來た。(口語)

成分の倒置

(二)成分の倒置 語調を整へ、または語勢を強めるために、成分の位置を變へることがある。詩歌には特にそれが多い。

咲け、花よ。
述 主

(述語を上)

我は送らむ、わが友を。
主 述 客

(同上)

雲のいづこに、月やどるらむ。
客 主 述

(客語を上)

正成を、誰かは、賞せざらむ。
客 主 述

(同上)

彼も、遂に逝きぬ、あゝ。
主 述 獨

(獨立語を下)

成分の省略

(三)成分の省略 文の意味が害されたり、または不明瞭になつたりしない程度に於て、文を簡潔にし、語勢を強めるために、その中の或成分を省略することがある。詩歌や對話には特にそれが多い。

今日(我)始めて鶯の聲を聞く。
(主語の省略)

(主語の省略)

千里の路も一步より(始まる)

(述語の省略)

(私は)明日(あなたに)逢ひませう。(口語) (主語・客語の省略)

あの人は(財産を)(子に)譲つた。(口語)

(客語の省略)

あの人は(財産を)子に譲つた。(口語) (同上)

練習

(一)次の文の成分を普通の位置に置きかへよ。

(イ) 仰げば貴し、我が師の恩。

(ロ) たゆまず學べ、時の間も。

(ハ) 謂ふこと勿れ、今日學ばずとも、來日ありと。

(ニ) 大なるかな、孝の徳。

(ホ) そんなことを、誰に、あなたはお聞きでした。(口語)

(ヘ) 早く出かけよう、さあ。(口語)

(二) 次の文の省略された成分を補へ。

(イ) 前へ進め。

(ロ) こゝに馬を繋ぐべからず。

(ハ) 我は少しも知らざりき。

(ニ) 樂は苦の種、苦は樂の種。

(ホ) あなたはどちらへ。(口語)

(ヘ) どうぞこちらへ。(口語)

(ト) 終日待つてゐたが、遂に來ない。(口語)

第三十一章 節

文が獨立を失つて、他の文の一部分となつたものを節といふ。これに次の五種がある。

(一) 名詞節 名詞の用をなす節をいふ。

名詞節

節

形容詞節

副詞節

述語節

小主語
總主語

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。
年月のたつのは早いものだ。(口語)

(二) 形容詞節 名詞を修飾する用をなす節をいふ。
學徳高き人は稀なり。

月の明かな夜は少い。(口語)

(三) 副詞節 述語を修飾する用をなす節をいふ。
水清ければ大魚棲まず。

彼は徳は高いが、學識は乏しい。(口語)

(四) 述語節 述語の用をなす節をいふ。
兎は耳長し。

瀬戸内海は景色がよい。(口語)

◎右の場合に、耳景色がを小主語といひ、兎は瀬戸内海はを總主語といふ。

對立節

(五) 對立節 相對立して同等の價值を持つ節をいふ。

月清く、風涼し。

雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。

雨が降り、風が吹き、雷が鳴る。(口語)

練習

次の文から節を擇び出して、何種の節であるかをいへ。

(イ) 身體健康なるは一生の幸福なり。

(ロ) 人々は船の着するを待てり。

(ハ) 志ある者は事竟に成る。

(ニ) 順境は友を作り、逆境は友を試む。

(ホ) 春は來たが、花は咲かない。(口語)

(ヘ) 日本人は忠義の心が深い。(口語)

文の構造上の種類

單文

第三十二章 文の構造上の種類

文はその構造によつて單文・複文・重文の三種に分れる。

(一) 單文 節を含まない文をいふ。

水流る。

落花雪の如し。

父母の恩は山よりも高し。

偽は慎むべく、戒むべく、且畏るべし。

生絲と茶とは我が國の重要な輸出品だ。(口語)

複文

菅公は才と學と徳とを兼ね備へてゐた。 (口語)

(二) 複文 對立節以外の節を含む文をいふ。

友の多きに過ぐるは友なきに等し。 (名詞節)

徳なき美は香なき薔薇の如し。 (形容詞節)

形なければ影なし。 (副詞節)

彼は性質勇敢なり。 (述語節)

重文

(三) 重文 二つ以上の對立節から成る文をいふ。

志堅く、望遠し。

月明かに、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

言ふことは易く、行ふことは難い。 (口語)

文の構造は以上の三種であるが、更に此等が混合して複雑の形となることがある。

花咲き鳥啼く春は樂し。

(重文を含む複文)

天氣よき日は暑く、雨降る日は鬱陶し。 (二つの複文から成る重文)

花咲き鳥啼く春は樂しく、

木の葉散り蟲鳴く秋は寂しい。 (口語) (重文を含む複文から成る)

練習

次の文の構造上の種類を述べよ。

(イ) 植物は發生し、成長し、枯死す。

(ロ) 重盛は忠臣にして孝子なり。

文の性質上の種類

- (ハ) 良薬口に苦しとはよき諺なり。
- (ニ) 燈臺下暗し。
- (ホ) 衣は軒に至り袖は腕に至る。
- (ヘ) 新しさもの必ずしも善からず善きもの必ずしも新しからず。
- (ト) 親は子を養ひ子は親を養ふは自然の道なり。
- (チ) 國破れて山河あり城春にして草青みたり。
- (リ) 春は去り夏は來ても何の音づれもない。
- (ヌ) 世の中は責任感の強い人を歓迎する。

第三十三章 文の性質上の種類

文はその性質によつて敘述文・疑問文・命令文・感歎文の四種に分れる。

敘述文

(一) 敘述文 事實をありのままに述べる文をいふ。

健康は至寶なり。

(肯定)

春は來れど花咲かず。

(否定)

近日の中に花も咲き始めよう。

(口語) (推量)

花はまだ咲くまい。

(口語)

(推量) (否定)

疑問文

(二) 疑問文 疑問または反語の意を表す文をいふ。

甲と乙との差如何。

(疑問)

名譽と富貴といづれを擇ぶか。

(同上)

庭球の選手は誰ぞ。

(同上)

吉野山に行つたことがあるか。

(口語) (同上)

空しく日をや過すべき。

(反語)

花は盛りをのみ愛づるものは。

(同上)

爲さで已むことやはある。 (反語)
 どうして黙つて居られよう。 (口語) (同上)
 ◎反語の文は、形は疑問で、その意は断定であるけれども、今は暫く疑問文の中に入れて置く。

命令文

(三) 命令文 命令または禁止の意を表す文をいふ。

- よく學び、よく遊べ。 (命令)
- 知らざるを知らずとせよ。 (同上)
- 堪忍は無事長久の基と知るべし。 (同上)
- 一寸の光陰も輕んずべからず。 (同上)
- 朝は早く起きろ。 (口語) (同上)
- 人の短を言ふこと勿れ。 (禁止)
- 人の悪口をいつてはいけな。 (口語) (同上)

感歎文

(四) 感歎文 感動の意を表す文をいふ。

- あゝ、正成は忠臣なるかな。
- あはれ、今年も半ばは過ぎぬ。
- やあ、よくやつてくれた。 (口語)

練習

次の文の性質上の種類を述べよ。

- (イ) 遠き慮なければ近き憂あり。
- (ロ) 己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。
- (ハ) 怒は敵と思へ。
- (ニ) 人の眞價の那邊に存するかを知れりや。
- (ホ) 問ふを恥と思ふべからず。
- (ヘ) あはれ、今年の秋も往ぬめり。

- (ト) 美しき花必ずしも芳香あるにあらず。
- (チ) 人の命は雨の晴間をも待つものかは。
- (リ) 櫻と梅と、どちらが好きか。〔口語〕
- (ヌ) 一の快樂には千の苦痛が伴ふ。〔口語〕

女子日本新文法終

附録

一

○練習問題

〔一〕品詞

次の文を例に示したやうに品詞に解剖せよ。

〔例〕 花は散れども惜しむ人なし。

名助 動 助 動 名形

- (イ) 志ある者は事竟に成る。
- (ロ) 人にして鳥に若かざるべけむや。
- (ハ) 今日九重に匂ひぬるかな。
- (ニ) まことに行末たのもしきこととこそ覺えしか。
- (ホ) 月色銀の如し。この良夜を如何せむ。
- (ヘ) 面白く遊ばむと欲せば、先づよく勉強すべし。

練習問題
品詞

動詞助動詞
の活用

(二) 動詞助動詞の活用

- (ト) 雪また雪誰かわが前程の安易を豫言し得るものぞあゝ。
 - (チ) 櫻花美しく咲きて、蝶の輕げに飛ぶさま、絶えてなき風景なり。
 - (リ) 見渡せば、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける。
 - (ヌ) ほのくゝと明石の浦の朝霧に、島がくれ行く船をしぞ思ふ。
- (一) 動詞の九種の名稱を挙げ、例についてその活用を示せ。
 - (二) 動詞の正格活用と變格活用との區別を説明せよ。
 - (三) 文語の變格活用と口語の變格活用とを對照して活用表を作れ。
 - (四) ア行、ワ行に活用する下二段の動詞を列舉せよ。
 - (五) ラ行四段活用とラ行變格活用との異なる點を説明せよ。
 - (六) 打消の助動詞を列舉し、その活用を示せ。
 - (七) 次の文から動詞助動詞を擇び出して、その活用を示せ。

音便

(三) 音便

- (一) 動詞の音便について知つてゐる所を記せ。

- (イ) 次の語の活用を示せ。
 - (イ) 夜更け、汐満ち、童等が焚火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消されぬ。
 - (ロ) 金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ
 - (ハ) 少壯の時徒に遊び暮さば、老いて後悔ゆとも甲斐なかるべし。
 - (ニ) 龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ。
 - (ホ) これその性の人と同じからざるものあるによれるなるべし。
- (八) 次の語の活用を示せ。
 - (イ) 落つ。樂し。ず。發す。べし。生ふ。堪ふ。新し。つ。
 - (ロ) 消。教。報。す。む。らる。
 - (ハ) 植。葬。授。倒。
 - (ニ) 懲。蹴。宣。投。居。

動詞の用法

〔四〕動詞の用法〔正誤〕

次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

- (イ) 恩を忘ることなかれ。
- (ロ) 教ゆれど覺へず。

- (二) 次の文から音便を擇び出し、且その原音をいへ。
- (イ) 舟筏をせ働はうて筑水を下る。
- (ロ) 世に處するもまた難いかな。
- (ハ) 且に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸る。
- (ニ) そこに立つては暗うございます。
- (三) 次の文のふうの假名の用法は正しいか。正しくなければ正し、且その理由を述べよ。
- 先輩を訪ふて教を乞う。

助動詞の意義用法

〔五〕助動詞の意義用法

- (一) るらるの凡べての用法を説明せよ。
- (二) すさすしむの活用を述べ、それと動詞との接續、及びそれによつて生ずる意義を述べよ。
- (三) 例を舉げて尊敬の助動詞を説明せよ。
- (ハ) 後に至りて悔いざるやう、よく困難に堪えて勉勵すべし。
- (ニ) 彼等のうち、大雪に遭あひ、飢へ且凍こへたるもの多し。
- (ホ) 人如何に笑うとも、自ら守るところ堅く、行い道に違はずむば、何の恥ずることかこれあらむ。
- (ヘ) 願の叶うやうに努力しやう。(口語)
- (ト) 深い理由があるのだらう。(口語)
- (チ) ち考に一任しましょう。(口語)

紛れ易い品詞

〔六〕 紛れ易い品詞

- (四) 推量の助動詞を列挙し、その用法を記せ。
- (五) べしの用法を例について説明せよ。
- (六) 助動詞まじを説明せよ。
- (七) 書けりのりは如何なる種類の語に續き、且如何に活用するか。
- (八) 口語の助動詞ますについて知つてゐる所を述べよ。
- (九) 次の文から助動詞を擇び出して、その種類及び活用を述べよ。
 - (イ) 男のすなる日記といふものを、女もして見むとするなり。
 - (ロ) 夢さめぬ、真柴や焚かむ、山の井の曉ふかき水や汲ままし。
 - (ハ) 吾人は義勇公に奉ぜざるべからず。
 - (ニ) 偉人は人を心服せしむべき魔力を有せり。

(一) 次の文の傍線のある部分の異同を述べよ。

(イ) 花ぞ咲きたる。
花咲きたるぞ。

(ロ) 散りなむ後ぞ戀しかるべき。

(ハ) 花の散るなむ惜しき。

(ニ) 草葉の上はよきて吹かなむ。

(イ) 花は咲けりや。

(ハ) 珍しやこの花。

(ニ) 心あらむ人に見せばや。

(イ) 心あてに折らばや折らむ。

(二) 次の文のとりしかは如何なる語法であるか。これをとりしがと讀む

時は、意義語法に如何なる差異を生ずるか。

昨日こそ早苗とりしか、いつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く。

助動詞の用法

〔七〕助動詞の用法〔正誤〕

次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

- (イ) 善をなさば人に敬はるゝべし。
- (ロ) 聴衆に多大の感動を興へり。
- (ハ) 彼は夙にその業を卒へり。
- (ニ) 街道の兩側に樹木を植ゑさしむ。
- (ホ) 恐らく急には宥ゆるさるゝまじ。
- (ヘ) 泣くが如く、怨むが如く、はた訴ふが如し。
- (ト) 己の言ひにくきことは人に言はさす。
- (チ) 不都合のことなきやう心得るべし。
- (リ) 満員札を掲げた場合には乗車するべからず。

助動詞の用法

〔八〕助動詞の用法

- (一) 助動詞の性質を概説し、併せてその例十五語を挙げよ。
- (二) 助詞さへの用法は文語と口語とでどう違ふか。
- (三) 次の助詞一つづつを含む句例を作れ。
とも。ども。だに。さへ。
- (四) や、か、の二語を次の二語に接續させて疑問文を二つ作れ。
有り。無し。
- (五) 次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。
(イ) 若し不明の點あれば速かに問ふべし。
(ロ) 世のならはしこそはかなきものなり。
(ハ) 昔の旅はさこそ不自由なりけむと思はる。
(ニ) 功を急あひまぎて過するな。
(ホ) 洋服の地と帽子の見本を送れ。
(ヘ) 若しち差支も候へば、御一報なし下されたく候。

文の成分

〔九〕 文の成分

- (ト) 如何なる方法を用ふれども、目的すら正しければ可なり。
- チ 霽るれば出てひと待つ雨の夕になるとも小止みもせず。
- (一) 文の成分の位置を例を擧げて説明せよ。
- (二) 今日といふ語を修飾語とする文と、主語とする文とを、おの／＼一つづつ作れ。

(三) 次の文を成分に分け、且省略された成分があれば補へ。

- (イ) 鳥は吾能くその高く飛ぶを知る。
- (ロ) 塵埃捨つべからず。
- (ハ) 好きこそ物の上手なれ。
- (ニ) 土手に登るべからず。
- (ホ) 道端の木槿は馬に喰はれけり。

文の種類

〔六〕 文の種類

次の文の構造上及び性質上の種類を述べよ。

- (イ) あら、有難の御心。
- (ロ) 見るこそ悲しけれ。
- (ハ) 夢と知りせば覺めざらましを。
- (ニ) 春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。
- (ホ) 一旦事あらば、身命を捧げて國家を防護すべし。
- (ヘ) 海極めて静穏にして、更に風波の憂あらず、毫も船體の動搖を感ずることなし。

- (ト) わが君は千代にましませ、さゞれ石の巖となりて苔のむすまで。
- (チ) 高千穂の高ねおろしに、草も木もなびきふしけむ大御代を、今日しも仰ぐ。

係結

〔二〕 係結

- (一) 例を舉げて係結を説明せよ。
- (二) 次の係結を説明せよ。
底ひなき淵やはさわぐ、山川の淺き瀬にこそあだ波は立て。

雜題

〔三〕 雜題 (正誤)

次の文に誤があれば正し、且その理由を述べよ。

- (イ) 漫りに出入を禁ず。
- (ロ) 昔受けまじき罪を受けてこの地に生を終りし人の裔^{すゑ}今もなほあり

やと尋ぬれば、かたへに青ざめる顔して立ちし一青年を指して、彼こそそれと教へける。

(ハ) 天の道は満ちるを罅^ひきて足らざるを補ひ、地の道は盛なるを減じて衰ふを扶けり。

(ニ) 天地はとゞこほることをさるふが故に、萬物を促してしばらくも止まらず。

(ホ) 貧しきは常なり。富めるは常にあらず。これ富めるは集めるが爲にして、集めるは滞らすかゆへなり。

(ヘ) 年を経るといへども、字面なほ鮮かにして、これを拂拭^{ふきとぎ}するも容易に消えることなし。

(ト) もし少しにても心を弛むれば、忽ち他に惑はせられて、多年の苦心は全く水のあわと消へ失せぬ。

(チ) 月の夜半こそ思ふ限もなく心の底も澄みわたるものなり。さ

れど、闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高ふ吹きこふは、また
 優るやうにぞ覺ゆ。といへば、雨こそいとまさりぬるを。と、或人いふ。
 (リ) 寺町を南に、四條を西に進まば、北側に宏壯の建物ありて、○○社なる
 表札を掲げり。
 (ヌ) 月霜の如く冴へ、風海の如く吼ふる夜は、人籟すべて絶へて、直ちに至
 上のこえを聞く心地す。

附録 二

文法上許容ス
 ベキ事項

○文法上許容スベキ事項(明治三十八年十二月二日
 文部省告示第百五十八號)

- 一、居リ「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二、シク・シキ活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四、コトナリ「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五、セサス「トイフベキ場合ニ」セラ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨
 ナシ。

例

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六、セラル「トイフベキ場合ニ」セラル「ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從
 フモ妨ナシ。

例

罪サル。

評サル。

解釋サル。

七、得シム「トイフベキ場合ニ、得セシム」ト用ケルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ、暮シシ時「過シシカバ」ナ

ドイフベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをは「ノ」「ハ」動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇、疑ノてにをは「ヤ」「ハ」動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一、てにをは「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞・及・受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

二二、てにをはノ「ト」フ、動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

二三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例

月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ。

二四、上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例

誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

二五、てにをはノ「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「トモ」ノ如ク用キル

モ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六、トイフ「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

シ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

〔終〕

形容詞活用表

文		口	
活用形	活用形	活用形	活用形
カ行變格(來)	カ行變格(來)	カ行變格(來)	カ行變格(來)
こ	こ	こ	こ
さ	さ	さ	さ
く	く	く	く
くる	くる	くる	くる
くれ	くれ	くれ	くれ
こよ	こよ	こよ	こよ
サ行變格(爲)	サ行變格(爲)	サ行變格(爲)	サ行變格(爲)
せ	せ	せ	せ
し	し	し	し
す	す	す	す
する	する	する	する
すれ	すれ	すれ	すれ
せよ	せよ	せよ	せよ
シク活用	シク活用	シク活用	シク活用
美	美	美	美
しく	しく	しく	しく
し	し	し	し
しき	しき	しき	しき
しけれ	しけれ	しけれ	しけれ
○	○	○	○
ク活用	ク活用	ク活用	ク活用
善	善	善	善
く	く	く	く
い	い	い	い
い	い	い	い
けれ	けれ	けれ	けれ
○	○	○	○

例
イハユル哺乳獸ナルモノ。
顔回ナルモノアリ。

〔終〕

動詞活用表

活用形	四段	ナ行變格	ラ行變格	上二段	上一段	下二段	下一段	カ行變格	サ行變格
文	讀	死	有	起	射	教	蹴	來	爲
未然形	ま	な	ら	さ	い	へ	け	こ	せ
連用形	み	に	り	き	い	へ	け	き	し
終止形	む	ぬ	り	く	ゐ	ふ	ける	く	す
連體形	む	ぬ	る	くる	ゐ	ふる	ける	くる	する
已然形	め	ぬれ	れ	くれ	いれ	ふれ	けれ	くれ	すれ
命令形	め	ね	れ	さよ	いよ	へよ	けよ	こよ	せよ
口	讀	死	有	起	射	教	蹴	來	爲
未然形	ま	な	ら	さ	い	へ	け	こ	せ
連用形	み	に	り	き	い	へ	け	き	し
終止形	む	ぬ	る	きる	ゐ	へ	ける	くる	する
連體形	む	ぬ	る	きる	ゐ	へ	ける	くる	する
已然形	め	ぬ	れ	きれ	いれ	へれ	けれ	くれ	すれ
命令形	め	ね	れ	さよ	いよ	へよ	けよ	こよ	せよ

(女子日本新文法)

形容詞活用表

活用形	ク活用	シク活用
文	善	美
未然形	く	しく
連用形	く	しく
終止形	し	し
連體形	き	しき
已然形	けれ	しけれ
命令形	○	○
口	善	美
未然形	○	○
連用形	く	く
終止形	い	い
連體形	い	い
已然形	けれ	けれ
命令形	○	○

推					打					時 ^①					種類		
量					消					完了			未來	過去		助動詞	文
む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり		
○	○	べから	べく	○	○	まじく	○	ざら	ず	(ら)	たら	な	て	○	(けら)	○	未然形
○	めり	べかり	べく	○	○	まじく	○	ざり	ず	(り)	たり	に	て	○	○	○	連用形
む	めり	○	べし	らし	らむ	まじ	じ	(ざり)	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	き	終止形
む	める	(べかる)	べき	らし	らむ	まじき	じ	ざる	ぬ	る	たる	ぬる	つる	む	ける	し	連體形
め	めれ	(べかれ)	べけれ	らし	らめ	まじけれ	じ	ざれ	ね	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	め	けれ	しか	已然形
○	○	○	○	○	○	○	○	ざれ	○	(れ)	(たれ)	ね	てよ	○	○	○	命令形
う			らしい		さい	ない	ぬ		た	よう	う	た				助動詞	口
○			らしく		○	○	○		たら	○	○	たら				未然形	
○			らしく		○	なく	ず		たり	○	○	たり				連用形	
う			らしい		さい	ない	ぬ		た	よう	う	た				終止形	
○			らしい		○	ない	ぬ		た	○	○	た				連體形	
○			らしけれ		○	なけれ	ね		たれ	○	○	たれ				已然形	
																命	

助動詞活用表

文語…括弧内のは古文にばかり用ひる。
口語…括弧内のも用ひる。

比 較	希 望		詠 歎		指 定		尊 敬			使 役			可 能		受 身		推 量						打 消			時											
	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとく	まほしく	たく	○	○	たら	なら	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	○	○	○	○	べから	べく	○	○	まじく	○	ざら	ず	(ら)	たら	な	て	○	(けら)	
ごとく	まほしく	たく	○	○	たり	なり	しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	○	○	○	めり	べかり	べく	○	○	まじく	○	ざり	ず	(り)	たり	に	て	○	○	
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	めり	○	べし	らし	らむ	まじ	じ	(ざり)	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとき	まほしき	たき	ける	なる	たる	なる	しむる	さする	する	らる	る	しむる	さする	する	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	める	(べかる)	べき	らし	らむ	まじき	じ	ざる	ぬ	る	たる	ぬる	つる	む	ける	
○	まほしけれ	たけれ	けれ	なれ	たれ	なれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ	けめ	ましか	め	めれ	(べかれ)	べけれ	らし	らめ	まじけれ	じ	ざれ	ね	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	め	けれ	
○	○	○	○	○	たれ	なれ	しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	しめよ	させよ	せよ	○	○	られよ	れよ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ざれ	○	(れ)	(たれ)	ね	てよ	○	○	
やうです	やうだ	たい			です	だ		ます		られる	れる	させる		せる	られる	れる	られる	れる	よう	う			らしい			まい	ない	ぬ		た		よう	う				
やうでせ	やうだら	たく			でせ	だら		ませ		られ	れ	させ		せ	られ	れ	られ	れ	○	○			らしく			○	○	○		たら		○	○				
やうでし	やうだつ	たく			でし	だつ		まし		られ	れ	させ		せ	られ	れ	られ	れ	○	○			らしく			○	なく	ず		たり		○	○				
やうです	やうだ	たい			です	だ		ます		られる	れる	させる		せる	られる	れる	られる	れる	よう	う			らしい			まい	ない	ぬ		た		よう	う				
やうな	やうな	たい			○	○		(ます)		られる	れる	させる		せる	られる	れる	られる	れる	○	○			らしい			○	ない	ぬ		た		○	○				
やうなれ	やうなれ	たけれ			○	○		ますれ		られ	れ	させれ		せれ	られ	れ	られ	れ	○	○			らしけれ			○	なけれ	ね		たれ		○	○				
								ます		られ	れ	させ		せ	られ	れ	られ	れ	○	○			()			○	()	()		()		○	○				

量		消			完了		未來	過去		類							
む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ぢり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	き	助動詞
○	○	べから	べく	○	○	まじく	○	ぢら	ず	(ら)	たら	な	て	○	(けら)	○	未然形
○	めり	べかり	べく	○	○	まじく	○	ぢり	ず	(り)	たり	に	て	○	○	○	連用形
む	めり	○	べし	らし	らむ	まじ	じ	(ぢり)	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	き	終止形
む	める	(べかる)	べき	らし	らむ	まじき	じ	ぬる	ぬ	る	たる	ぬる	つる	む	ける	し	連體形
め	めれ	(べかれ)	べけれ	らし	らめ	まじけれ	じ	ぬれ	ぬ	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	め	けれ	しか	已然形
○	○	○	○	○	○	○	○	ぬれ	○	(れ)	(たれ)	ぬ	てよ	○	○	○	命令形
う			らしい			まい		ぬ		た			よう	う	た		助動詞
○			らしく			○		○		たら			○	○	たら		未然形
○			らしく			○		なく	ず	たり			○	○	たり		連用形
う			らしい			まい		ぬ		た			よう	う	た		終止形
○			らしい			○		ぬ		た			○	○	た		連體形
○			らしけれ			○		なけれ	ぬ	たれ			○	○	たれ		已然形
○			○			○		○		○			○	○	○		命令形

助動詞活用表

文語…括弧内のは古文にばかり用ひる。
口語…括弧内のも用ひる。

較	望	款		定		敬			役		能		身		量						消				完了			未	來					
		なり	たり	なり	たり	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	らる	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	めり	べかり	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとく	まほしく	たく	〇	〇	たら	なら	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	〇	〇	〇	〇	べから	べく	〇	〇	まじく	〇	ざら	ず	(ら)	たら	な	て	〇	(けら)	
ごとく	まほしく	たく	〇	〇	たり	なり	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	られ	れ	〇	〇	〇	めり	べかり	べく	〇	〇	まじく	〇	ざり	ず	(り)	たり	に	て	〇	〇	
ごとし	まほし	たし	けり	なり	たり	なり	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	めり	〇	べし	らし	らむ	まじ	じ	ざり	ず	り	たり	ぬ	つ	む	けり	
ごとき	まほしき	たき	ける	なる	たる	なる	しむる	さする	する	らる	る	らる	る	らる	る	けむ	まし	む	める	(べかる)	べき	らし	らむ	まじき	じ	ざる	ぬ	る	たる	ぬる	つる	む	ける	
〇	まほしけれ	たけれ	けれ	なれ	たれ	なれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ	けめ	ましか	め	めれ	(べかれ)	べけれ	らし	らめ	まじけれ	じ	ざれ	ね	(れ)	たれ	ぬれ	つれ	め	けれ	
〇	〇	〇	〇	〇	たれ	なれ	しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	られよ	れよ	られよ	れよ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	ざれ	〇	(れ)	(たれ)	ね	てよ	〇	〇	
やうです	やうだ	たい			です	だ	ます			られる	れる	される	せる	られる	れる	られる	れる	よう	う		らしい			まい	ない	ぬ		た			よう	う		
やうでせ	やうだら	たく			でせ	だら	ませ			られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	〇	〇		らしく			〇	〇	〇		たら			〇	〇		
やうでし	やうだつ	たく			でし	だつ	まし			られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	〇	〇		らしく			〇	なく	ず		たり			〇	〇		
やうです	やうだ	たい			です	だ	ます			られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	よう	う		らしい			まい	ない	ぬ		た			よう	う		
やうな	やうな	たい			〇	〇	(ます)			られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	〇	〇		らしい			〇	ない	ぬ		た			〇	〇		
やうなれ	やうなれ	たけれ			〇	〇	ますれ			られ	れ	させれ	せれ	られ	れ	られ	れ	〇	〇		らしけれ			〇	なけれ	ね		たれ			〇	〇		
〇	〇	〇			〇	〇	ませ			られよ	れよ	させよ	せよ	られよ	れよ	られよ	れよ	〇	〇		〇			〇	〇	〇		〇			〇	〇		

書簡の分類と内容

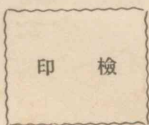
宛	名	姓	名	姓	名	姓	名	姓	名	姓

動詞と助動詞との接續表

り まほし しむ まし じざり ずむ さす らる する	未然形に	文	語
サ變 以ラナ四 外變變段	連用形に		
ぬ ナ變以外	終止形に		
なり (詠歎)	連體形に		
ごとし なり (指定)	已然形に		
り 四段	命令形に	口	語
ない ぬ まい させる られる よう せる れる う	未然形に		
外以段四	連用形に		
た ます たい たが う	終止形に		
らしい まい 四段	連體形に		
だ です やうだ やうで す さうた さうた さうた	已然形に	命令形に	

(女子日本新文法)

法文新本日子女



昭和三年九月十四日印
昭和三年九月十七日發行
昭和三年十二月十八日訂正再版印刷
昭和三年十二月廿一日訂正再版發行

著者 久松潜一

發行者 株式會社 東京開成館
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

代表者 松本繁吉
印刷者 高橋郁
東京市京橋區銀座西二丁目三番地

發行所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館
〔電話〕小石川(85)三六三六、三六三八、三六三九
〔振替貯金口座〕東京第五參貳貳番

定價 金拾六參錢

三協印刷株式會社印刷

